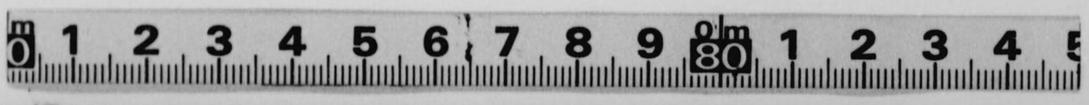
369
14



左右田喜一郎論文集

第貳卷

369-14

左右田喜一郎著

文化價値と極限概念

大正
11. 6 27
内交

東京 岩波書店發行

HEINRICH RICKERT

ZUGEEIGNET

初版　大正十一年四月

序

如何なる學問研究者も彼が嚴肅なる學的良心を有する限り自らの研究する當面の問題について假令一段落を告げ得たと思ふときでも、常に其の內には更に解決を要すと思惟する根本問題の殘されて居ることを思はぬものがあるであらうか。そして此の如き根本問題の更に深き考究によつて前きに段落をつげ得たと思はしめた問題の意味を一層明にし之を補足せしむるに至らざるものがあるであらうか。此の意味に於ては如何なる研究と雖も自足完了の狀態に至るといふことを以て常に一個の永久に實現することを得ざる理念とせざるを得ないものであらう。

淺學韭才の著者は未だ嘗て彼が發表する如何なる研究に於ても此の念ひに煩はされざるものは殆んどない。然れども彼は寧ろ之に依つて私かに研究者たるの光榮と誇とを感じつゝあるものである。

今此の論文集卷第二に收められたる如何なる研究と雖も皆例外なく後來の考察によつて更に其の意味を一層明にせられ之によつて補足せらるべきものなることを思はざるを得ない。著者は此の思ひの爲めに一度何等かの形式に於て既に發表せられたるものを再び現在の形ちに於て更に之を公刊するに對しては大なる不安を感ぜざるを得ざるは云ふまでもない。唯だ希くは本書を世に出すことに依つて自らの研究題目の處在と意義とを著者自身に一層明確にすることが出來、且之に依つて同學及び先輩から彼の氣付かざる幾多の問題につきて刺激多き明示乃至暗示を其の批評によつて得たいと思ふこと切なるのみである。而して人は庶幾くは之を以てあまりに多くを人に求むるものとは思はぬであらう。

若し萬一是以上に、著者の思想を今日の如くならしむるに重大なる要素を形成しつゝある獨乙文化並に其の哲學思想に對して假令讀まれざる國語に於てなりとも幾分の寄與をなすことを得、人類全般の文化の上に人類全般の思想の上に猶ほ人をして國破山河在と思はしむるに幾分の貢献をなすことを得ば、著者は交遊を親しふせる獨乙に於ける先輩學友の禁じ得ざる微笑を想ふて自ら滿足の極とするものである。學問に國境なし、暴力を以て思想を壓すべからざるの一例を若し幸にして著者の微力によつて提供する事を得ば、學問の自由の爲めに思想の獨立の爲めに著者は望外の事業を成し遂げ得たりとして限りなき喜びを内に抑ふるに堪え得ざるものである。カントを有しゴエテを有し更にベートホーヴェンを有する民族の文化は軍力を以ても經濟力を以ても之を壓迫し盡くすことを得ない。著者は人類全體の爲めに西歐文化の根源としてラテン民族の文化と並立してゲルマン(ドイッ)民族の文化の榮え行くを見んことを希はざるを得ない。此の二民族の文化には人類の在らん限り共に相率ゐて其の過去に酬ゆるだけの將來を與へてほしい。著者は此の二民族の間に屢〻軍力的破壞的爭鬪の行はるゝを見て人類文化の爲めに此の上もなき悲劇と思ふ。

恐らくは著者に於て此の如き尊崇憧憬の念ひなかりせば目前に横はる此の一小著と雖も到底此の世に生れ出でなかつたであらう。此の意義に於て著者は今日迄の彼の思想を形造るに與つて力ありたる典型的獨乙の學者ハインリッヒ、リッケルト先生に本書を献ずるを得るを以て限りなき幸榮と思ふものである。

若し夫れ此の書の内に收められたる諸篇が我が日本に於て既に種々の機會に於て公表せられたる度毎に之を緣として著者に對して特に其の好意を新にせられたる哲學專攻の學者、殊に京都帝國大學の哲學科教官諸氏が攻學上に於て彼に與へたる刺激の大なることに向つて玆に深厚なる謝意を表せんとするは著者にとつて誠に快よき義務の遂行たるを覺えざるを得ざる所以である。謹んで感謝の意を表せんと欲する。

大正十一年三月八日

著　者

目次

第一編　價値哲學研究

一　價値哲學より觀たる生存權論……一—三七

附錄　平等主義の一考察……三九—五〇

二　文化主義の論理……五一—七四

附錄　價値生活としての人生……七五—八一

三　價値の體系……八二—一七二

四　個別的因果律の論理……一七三—二二一

附錄　個別的因果律の論理につきて左右田博士の教を乞ふ……文學博士　田邊　元……二二二—二二四

個別的因果律に關して更に田邊博士の教を俟つ……二二五—二五〇

第二編　『極限概念の哲學』研究
五　極限概念としての文化價値……二五一―二九九
六　合理性對非合理性の問題を通じて觀たる『極限概念の哲學』……三〇一―四八四

第一編　價値哲學研究

價値哲學より觀たる生存權論

國民經濟雜誌 第二十五卷 第六號
（大正七年十二月發行）所載同題文訂正

價値哲學より觀たる生存權論

一

近世國家の政治生活に於て今や萬人の見て以て尋常茶飯事なりとするものに於て、却つて大に考究を要すべきもの所謂多數決の制度に如くものはない。或一事の遂行に當つて之に參加する人員の多少によつて其の贊否及び進むて當否までも決せんとす。試みに思へ、一數學の問題を提げて解釋の當否を其の解答せんとするもの丶人員の多少によつて決せんとするものあらば人は何を以て之を評すべきか。奇なる哉、獨り社會上の問題は憲法上の疑義に至るまて現今の狀態に於ては殆ど皆多數決によつて其の正否を決しつゝある。若多數決の語義を廣く解釋して民衆一般とすべくんば、人文科學上の眞理は恐く其の大部分は暗々裡に所謂輿論によつて決せらるゝと云ふも過言てない。現今の經濟學を稱して第三階級の哲學と云ふものあらば、其は何等かの意義に於て最

後の決定機關に於て第三階級が多數を占むるからである。アントン、メンガーと共に今日の國家諸學も亦權力關係の反影に過ぎずと云はゞ、是亦其の眞理が最後の決定機關に於て權力階級の多數によつて決せらるゝからである。凡そ一學問上の眞理が其の探究者の人員の意見の多少によつて決せらるべしと主張するものあるを聞かば、人は一見其の不道理に驚くであらう。而も社會諸科學上の眞理が以上の意義に於て多數決によつて其の正否が決せらるゝと稱せられても、亦一面の眞理を其の裡に含むものなることを拒むを得ない。況んや社會一般の施設、政策に於て多數決によつて其の當否更に進むては其の正否に至るまで決せらるゝことを見るに於て、何人も殆んど現時の狀態に於て之を怪むものあることなし。社會發展の歸趣に照して一人の意見が萬人の意見に劣るべしとか又は眞ならずとは如何にして先天的に定め得べきぞ。人格の完成、自由の境地を目標とし、自己實現を以て理想とする近世の個人主義が、他方に於て他人格を手段視せず目的視せんとすることから、延いて終には單純に其の數量上の多寡に從つて妥當と否と、眞理と否とを決せんとするに甘んぜんとするを矛盾とは思ひ得ぬか。此くして個人の自覺、發揚は到底個人の滅却に終らざるなきを得るか。

余は此の矛盾を次の如く解せんと欲する。

嘗つてジムメルが解したる如く各個人は社會に於ける諸活動の Knotenpunkt である、各個人は數多の活動によつて社會に連る。社會的諸活動は個人を通じて他の個人に續く。個人は諸活動の中心點であり結び目である。此の如き幾多の小中心點を結び付けて一個の偉大なる社會と稱する網が作らる。此の場合に一方に於て全人格の滅却を認容し得ざる個人の自覺があり、各個人其々其自身を以て目的とするにも不拘、他方に之によつて生成せらるゝ社會の出現を可能ならしめんとする爲には、嘗つて余が他の機會(Sulz. Geld und Wert. S. 18 ff.)に於て述べた如く、個人の或一面的解釋が可能となり且其の一面的活動の社會生成が考へられ得べき可能性がなければならぬ。即ち個人活動の分割が可能と考へ

られ、其の特定の方面に於て生成せられたる社會の幾多のものが考へられ而して其の特殊の社會に於てのみ多數決は合理なりと考へられなければならぬ。即ち各個人は特定の活動範圍に於て抽象的に考へられ彼、是を以て代置し得べき如く凡て同値代替的に考へられたる場合に於て、多は寡よりも價値多しとして決定權を與へらるべしとするのである。其の最後の論據は三人の主張は二人の主張する所に對して、凡ての條件同一なりと假定せらるゝ社會の場合に於て、前者は後者に比して何物かあつて其の目的に近づかしむる或物が其の間に存せざるべからずとする推定に基くのであらう。勿論近時の社會生活に於て團體の力を重要視する傾向から、團體の行動を單位とするの必要上より見て個人を離れて團體の意見を確定するに當つて、多數決によるより外に仕方がないと云ふことは實際上の事實であるが、之を是認すべき論理上の根據は上に述べたものと見るより以外にはあり得ないと思ふ。然らずして徒らに各種現象の社會化を說いて個人を無視するものは到底個人人格の滅却に終らざれば止まぬ。此くして多數決は其の特殊の活動に於て其の特定の範圍に於て各個人を全く平等化すると云ふ前提に於てのみ合理的、合目的的であつて、此の如き多數決の適用せらるべき活動の範圍の數が許多あるべしと考へられ、其の幾多の活動の Träger として各個人は考へらるゝのである。余は此の意味に於てのみ多數決は基礎づけられ得べしと信ずる。而して是以上に多數決の意味はない。

茲に於て問題は起る。各個人の活動の一々に於て多數決を可能ならしむる社會生成が遂に各個人の全部を absorb するに至らざるなきを得るか、若各個人の活動が其の分割的に生成せられたる社會の全部に於て多數決を許すべしとすれば、全人格は遂に單純に數量上の單位と化し終らざるなきを得るか。生活の各範圍に於て而して此くして全範圍に亙りて多數決を許すべしとすれば、各個人は畢竟如何なる意義に於ても而して凡ゆる意義に於て「日比谷原頭の陣笠」に終らざるなきを得ないであらう。

問題は常に古い。實證主義、經驗主義、心理主義、唯物主義は之に對して然りと

云ふより以外に術なきは當然である。恰も認識は經驗的印象の全部に等しと云ふと同一である。個人活動の全部は個人自身を deoken し、若其の活動の各々に於て假に全部に亙りて多數決を許す社會生成が可能なりとするならば、個人の全部は社會に吸ひ取られて其の各々に於ける重要は只數量上の單位と化し終るの外はない。而して現代文化の民衆化的風潮は假令活動の全範圍に亙りて此の單位化を可能ならしめずとも、其の全生活に殆ど決定的の影響を與へ得べき特定の生活範圍に於て、個人の沒入を前提とする社會生成を可能ならしめ且其の社會に於て多數決を强ゐんとするの勢が甚だ强い。此くの如くして遂に個人は單に社會の一員としてのみ重要を有し而して單に數量上の一員としてのみの重要を有するに過ぎざらんとするの勢にある。此の如くんば啻に各活動範圍に於ける個人を以て其の特定の社會の中の Gattungsexemplar として解釋を許すと云ふに止らず、各個人一般を以て亦單純に一個の Gattungsexemplar としてのみより以外に意義なしとするに至るものである。換言すれば各人格を以て一の Gattungsexemplar とするに至るものである。是人格の謂はゞ自然科學的概念化に過ぎない。茲に於てか此の點に於ても亦「自然科學的概念構成の限界」を說きて他の科學の存在を主張するに足るべき文化の根原としての人格の自由と獨立と其の特殊性とを想ふものに會すべきは寧ろ當然である。カント既に一百年の昔にあつて人格の自由と獨立とを說き、フヰヒテ、シエリング、ヘーゲルによつて發展せられたる歷史哲學は或は自我を高調し或は客觀價値と區別して絕對價値を擧げ具體的絕對の自己發展進化を力說す。共に個人に於て經驗界に aufgehen せられ得ざるべき或物あつて先驗的、超越的の背景をなし、此の「アプリオリ」に存在の根據と理由とを有するによつて、個人の活動に於て又之を成員とする社會の活動に於て各人格は自由にして且獨立に文化の歸趣に朝することを得べしとするのである。恰も認識に於て凡ゆる經驗的印象以外に抑も之を統一に導くべき先天的形式あることを豫想せんとするに同じである。若然らずして各人格を以て單純なる一 Gattungsexemplar 以外意義なしとするなら

ば、其の窮極、極致に於て二以上の人格の存在すると云ふ事實其の事が既に異質性のものゝ存在するといふことを直觀的に認容せざるべからずと云ふ意義に於て到底解明するを得ざることに屬する。逆言すれば各人格なるものは其の活動の全部を以て猶覆ふことを得ざる或物なることを示し而して此の境地に於て凡ての人格は平等に非ず何等かの意義に於て特殊不代替的の意味を其自身に包含し、價値上に於て何等かの差別あることを許すべしと云ふに歸する。若凡ての人格にして平等なりとの言に意義あらしめんとすれば、其は經驗的各個人の凡てを超えたる或「アプリオリ」に對する特殊の關係に於て見られたる場合に、其の「アプリオリ」に關係すると云ふことのみが然りと云ふのであつて、其の關係に於ける內面的重要、意義に於ては各人格は連續的且一義的に上下の階層をなすと云ふべきものである。即ち或價値實現の過程として凡ての人格は其の各々の處を占め得べきものであり、或超越的價値に對するものとしては各人格は代置し得べからざる其自身固有の重要を有するものとして見られざるべからざるものである。是各人が此の世に生き得べき唯一の存在理由である。若之に反して全人格に於て吾、彼を以て代置し得べしと云ふならば、吾の人格の存在理由は果して何處に存するぞ。余は之を考へ得べき道を知らない。

此の如くして各人格は夫々各特殊の重要と意義とを有すべきである。此の意義に於てのみカントの所謂「只人類及び此と共に凡ゆる理性的存在は目的其自なり」Nur der Mensch, und mit ihm jedes vernünftige Geschöpf, ist Zweck an Sich selbst. (K. d. p. V. Reclam-Ausgabe. S. 106.) と云ふ言葉は解釋せられ得べきである。夫の全人格を滅却せしむべき絕對服從關係は如何なる生活範圍に於ても、其が政治上にあれ、其が經濟上にあれ、其が思想上にあれ其の內の一人格の立場よりしては認容せられ得べきことでない。假令價値階段の高層にある人格と雖も其の下位價値階段にある人格に向つて絕對の犧牲を要求し得べき權利もなければ理由もない。之を要求し得べきは人格と云ふ核心に觸れざる活動の圈內に於て即ち多數決を正當視せしめ得べき如き生活範圍に於て、其の目的遂行の爲の便宜問題

としてのみ許さるべきである。匹夫も猶且奪ふべからざる人格の核心に向つて如何なる人格も之に絶對の服從、犧牲を要求するは、人格の價値を認むるものに對しては許容せられ得べからざることである。

然らば此等の凡ての人格を其の階段に置き依つて以て其の特殊の處を占めしむべき價値實現の歸趣たる超越的文化價値の立場より一人格の完成の爲に他の人格の犧牲を要求することは是認せらるべきか。一人格滅却するも他の人格にして完成せらるとすれば、之によつて價値實現の過程に一歩を進むるものと解し得べきが故に、一見此の超越的價値の立場よりしては一人格の爲に他の人格の服從乃至犧牲は是認せらるべきが如くである。而かも此の立場を徹底的に論理的に考ふるときは然らざる所以を見ざるを得ない。其の理由は超越的文化價値は現時の新カント派哲學が解する如く形而上學的なることを許さず、超越的なれども而も內在的なるべき(transzendental und doch immanent)批判哲學の立場を去ることを許さゞるものであるから、余が他の機會に於て述べた如く文化價値なるものは其連續的經驗內容の極限概念としてのみ意義あるものである。(後出「極限概念としての文化價値」參照)　連續的なる存在の窮極に於て當爲(Sollen)として存在すべきものである。依つて其の經驗的存在の連續を强制的に又意識的に破壞する結果に導くべき一人格の犧牲滅却によつて或他の如何なる人格の完成も之を期すべからざれば也。一人格の完成と否とは唯々其の係はらしめらるべき當爲に對する關係によつてのみ決せらるゝこと以外に其の意味はないからである。即ち「文化價値の哲學」の立場よりしては超越的文化價値の看點よりしても又は其の之を極限とする價値實現の過程に於て各特殊の地位を與へらるべしとする各人格の何れのものゝ立場よりするも、共に其の內の人格の或ものに對する絶對の服從、絶對の犧牲を要求し得べき理由は先天的には何物もあり得ない。此の如き絶對の服從、絶對の犧牲を要求し得べき世にも唯一の立場なるものありとすれば、そは形而上學的宗教に於てのみ可能である。

此の立場に於ては一個の價値は云ふ迄もなく形而上學的、超絶的(transzendent)

である。此の如き超絶的の立場にある價値は經驗的存在に對して全く絶緣せられたる地位にある。如何にして經驗內容が一個の大なる溝渠を超へて此の境界に侵入し得るかは論理上說くべからざることに屬すると同時に、反面に於ては經驗的內容の各々が此の價値に對して連續的、遞昇的の關係にあることを必要としない。通俗的に曰へば經驗內容の各々が此の價値に對して有機的の關係にあることを必要としない。神祕的に一個の經驗內容が一の大なる飛躍をなして此の價値を把握するを可能なりとするのである。故に經驗內容の一は必ず他と協働の關係にあることを必要とすべき理由はない。即ち形而上學的、宗教的立場に於てのみ一人格の爲の他人格の犧牲、服從を强ひ得るを認容し得べきである。反對に此の立場を是認し得ざる吾等にとつては一人格の爲に他の人格に對して絶對服從關係を是認せしむべき、絶對の犧牲を要求し得べき理由も權利も發見し得ない。三軍は帥を奪ふべき也。奪ふべからざるは人格の尊嚴である。而して其の之を基礎附けし得べきものは文化價値の外にない。

文化價値あつて當爲として立つに於てのみ各人格及び其の諸々の生活範圍に於ける活動の凡てを包含する經驗內容の極限として考へらるゝの故を以て、各人格は其々に其の特殊の地位を保持するものとして獨立を得べきである。各個人が其の各の生活を價値生活として觀察するは唯だ此の立場に於てのみ可能である。各個人の各生活範圍に於ては、夫々の特殊の文化價値を其の極限として有するのみならず、其の各個人の人格一般の極限として文化價値一般を解釋するに於て文化價値の哲學の體系は組織せられ得べきである。所謂人格の自由を稱道するものは其の最後の歸着點を玆に求めざるを得ないであらう。服從、犧牲は便宜問題、合目的問題として分割され得べき活動の範圍に於てのみ是認すべきことである、人格の上に於ては之を認容すべき一の立場もあり得ない。玆に文化價値哲學の出發點と到着點とがある。

二

今此の論を窮極に導くに當つて經濟政策乃至社會政策の歸趣を生存權の認

承に求むべしとするの論を顧みて見たい。

生存權とは所謂經濟上の三大基礎權(勞働權、勞働全收權、生存權)の一であつて十九世紀以降の社會學說が產むだ特殊の要求を意味する權利である。凡そ人の此の世に生を享くるや何人も自らの生存を念とせざるものあらざるはない。幼となく壯となく老となく、男となく女となく、意識的に又は無意識的に生存を第一慾望として要求せざるはない。生存權は此要求に對して社會的に權利としての認承を求めんとするものである。生存の慾望は古往今來不變なるべきである。殊に近世に至つて其の要求の大なるものあるを致す所以は、物質上の意義に於ては十八世紀末以降經濟組織乃至社會組織の變革により普に生理的に生存を危ふせしめらるゝ多數の社會的弱者あるに止まらず、生理的生存を全ふせるものも其の各々の文化狀態に適應せる生存狀態を保つこと能はざるものの多くを生じたるに、他方には思想上に於て個人主義、平等主義の確立より延いて此等の弱者をも成員とする社會文化の進展が意識的なる此等民衆の努力によりて生成せらるゝ所以を明にせられたるが爲に自ら之に參加して其の結果を共に享受せんとする强き生存慾を感ずるが爲なり。近世の文藝に於て强き個人主義が其の根抵に於て烈しき生存の慾求を伴ふものある所以を描寫するもの多きは此の間の消息を傳へて餘りあるものである。其が思想上或主義の確立に基いせずして一向に强烈なる肉感の刺激によりて生存の意識に安んぜんとしたのが「デカダン」である。十八世紀末以降種々の機會に於て種々の論客により取扱はれ來つた生存權論は十九世紀末二十世紀初頭に於て更に新しき面目を備へて現はれつゝ來つたのは蓋し大に意味あることである。吾等が茲處に考究せんとする生存權論の方面は近時の社會生活に於ける强烈なる生存慾に基するものとしてよりは寧ろ社會組織の民衆化的政策の基礎として、即ち福田博士の言を籍りて曰へば近世社會政策の哲學としての生存權論に關す。

社會生活に於ける一個の要求が社會として國家として之を權利として認むべしとするは(1)其自身に於て何物も矛盾する所あらず、恐くは凡ての權利皆其

の根據は玆に在る。若夫此の如き社會生活上の權利を享くるものは其の社會生活に對して貢獻する所あるによつて之を與へらるべしとする所謂報酬主義が社會權認承に對して其の理論的根據を與ふる所以に非ずとせらるゝも(2)亦近世社會生活の解釋に照して矛盾する所はない。社會が其の構成分子たる各員の存在を完からしむるは即ち社會の目的の一部なりとするの見地から何人も認容せざるべからざる solidarité sociale に於て如何なる人の富も、技術も、才能も、勞働も社會の爲に利用せられざるべからざる義務を有するが故に、玆に社會に對して當然權利を生じ、此の權利行使の可能なる爲に各人の生存は其の社會の內にあつて先づ權利として確保せられざるべからずとするは、社會生存の目的より見て寧ろ事理當然である。即ち社會の各員に對して生存權を與ふることが現存法律上の權利思想と矛盾することなきや、現存社會生活の解釋に背反する所なきを得るやは吾等には問題とはならない。此の點に於ては一國政府の財政が許す以上は其の國民の生存權を認めて之に物質的要求を充たさしむるに何人と雖も何等の異議あるべき筈がない。所謂「法律の社會化」としての一現象として當然見ざるべからざる權利の設定である。(3)

(1) 福田德三稿社會問題及社會政策概論(經濟學研究前編第一〇四一頁以下)
同上生存權概論(經濟學研究後編、續經濟學研究第四八二頁以下)
同上生存權の社會政策(改訂經濟學考證第一四五頁以下)
同上穗積博士の隱居論を讀む(同上第九二頁以下)

(2) 穗積陳重著隱居論第六九一頁以下參照

(3) 牧野英一稿法律の社會化(現代の文化と法律第一頁以下)
穗積重遠著法理學大綱第一八〇頁以下
同上稿法律上の權利に就て(哲學雜誌第三八五號所載)參照

之に反して玆に吾等が考究を要すべしとする問題は生存權を與ふる理論上の根據は社會組織の必要てふ純粹に經驗的事項以外何物か社會哲學上の基礎を有せざるか否かに關し而して其の當否如何に係はる。

若其の生存權を認むるの論據が單純に社會組織の必要と云ふ經驗的理由に

過ぎぬとすれば其の組織の如何によつて左右改廢せらるべきこと、恰も吾人が雨天には傘と足駄を用ゐ晴天には之を棄てゝ草履を用ふると一班なるが如きものとなるに至る。三大經濟權の一として生存權を見んとする論者は、單純に近世の社會生活と古への其とを比較して、後者が少數なる個人の權力によりて左右せられたるに反して前者が民衆の努力に俟つべきこと多きの理由により、現時の社會組織の必要上其の成員一般に生存權を與へんとする臨機應變的政略に於て其の理論的基礎盡くとするものではない。或は社會組織の根本目的に照し或は近世經濟生活の構造に顧み、徹底的に根本理論を建立せんことを勉むるものである。假令多數民衆により成る社會の力大なるを致したるが故に、其の成員の存在を完からしむる必要古へに比して增したるが爲に、生存權を與ふべしとするの論が實際上に起り來りたりとするも、其の成員一般に對して生存權を與ふべしとするの論據其のものに至つては、其の此の如き社會組織の必要てふ單純なる經驗的事由以外又は以上に求めねばならぬ筈である。

生存權の認承によりて物質上の利益を享くべきものは社會上の弱者である。併しながら此の社會上の弱者を保護して生存を完ふせしむるは寧ろ社會組織の必要と云ふことには背くものであつて、單純に之によつて生存權は說明し得らるべくもない。社會上の弱者を包含する社會を强者と共に其の在るが儘に自然的に存續せしむることを以て社會の目的の一部を遂行するものなりとするは、其の現在の狀態を出來得る丈維持し且自然的經過によつて將來、否、次の瞬間に於ても最早變化したる狀態之を換言すれば一度發生したる自然狀態は悉く人爲を以て能ふ限り變化せざらしめんとする努力が正當なりとの論據を是認することゝなりて、單純に現存社會組織に順應すると云ふ經驗的事由のみを以て生存權の論據とするものに非ずと云ふことを示して餘りあるものである。換言すれば此の場合に於ける生存權の論據は一種の自然主義を眞なりとし、可なりとするものに移り行きて簡單に社會組織の必要と云ふ如き一經驗的事由の天地に跼蹐することを得ざるを明示して居るものである。即ち玆處にも亦

單純なる經驗主義は論理上立ち得ない。

一度發生したる社會成員の現在狀態は出來得べくんば之を永久に保たんとするは他方に其の說の當否は兎まれ角まれ優種學(Eugenics)の如く其の成員の素質を改良するを以て社會組織の目的により善く合致するものなりとする思想とは相容れぬ。一度發生したる自然狀態を變化せざらしめんとする一種の自然主義的努力あるが爲に、却つて他方に所謂自然淘汰の人口法則を不變の鐵則として遵奉せんとする同樣なる自然主義的思想に背反するを以て「理論上に於て兩立するを得ず」之を打破すべき論據を見出ず能はず」とする如き自繩自縛の內面的論理上の矛盾に苦しむるに至るのである。(1) 共に根本に於て自然即價値なりとする誤まれる經驗主義、心理主義、實證主義、自然主義的論理の權限超越を敢てするが爲である。是一方に於て自然法則の凡ては經驗內容に對して先天的範疇が與へられて生成せられたる主觀の認識成果なることを忘れ、他方に社會生活の目的は自然主義に反して目的論的意匠的に當爲として吾等に課せられ(aufgegeben)たるものなることを顧みざるに出づ。マルサスの所謂人口法則が嚴密なる意義に於て自然法則の一なるや否やは玆に措いて問はず、只彼自ら一個の法則を立し得たりと信じつゝあるに際して、彼の指示する如く moral restraint, vice and misery の如き抑制あるも自然淘汰なりと考ふるに支障なきと同樣に、生存權の認承によりて此等の抑制を弱め社會上の弱者を增加するも亦論理上自然法則の樹立に關する所なかるべき筈である。要は此の如き場合に於ては單にマルサス人口法則の內容を異にする結果に導くに至ると云ふべきのみ。換言すれば此の如き場合に於てマルサス人口法則は余が他の機會に於て述べたる如く、內容極めて確立せざる一個の所謂經驗法則に過ぎずと云ふことを示すのみである。反之理論上に於ては所謂人口法則と生存權の認承とは優に兩立し得べきものである。

(1) 福田德三稿穗積博士の隱居論を讀む(改訂經濟學考證第一〇三—四頁)
同上人口法則と生存權(經濟學研究後篇第一二〇九頁以下)

同上マルサス人口論出版當時の反對論者特に生存權論者(改訂經濟學考證第二一九頁以下)

生存權論は此の如くして社會組織の必要上より臨機應變的に生れ出づべきものでなく又社會組織の根本目的に對するものとしては意匠的に產れ出てたるものでもない。而かも他方上述の如く誤まれる自然主義に基礎を有し得ざることも明かである。

佛蘭西大革命以來平等主義は凡ゆる社會運動の根基をなし確かに一面の眞理を握つては居るが、其の所謂平等主義を奉じたるものは其の初めは啻に之を理想として有するのみならず時に意識的及び無意識的に之を事實として信じたるが如くであつた。經濟上社會上機會均等主義を稱へて生れながらにして有する各種階級に於ける特權を破らんとしたるは平等主義を事實として信奉するに非ずんば無意義である。何となれば事實上萬人平等なりとするに非ずんば機會を與ふること均等なりとするも、其の結果は直に不權衡を來すこと明白なる狀態を如何にして無視するを得るかは解し得べからざることに屬するからである。今日に於ても各種の運動に於て先づ機會均等を說くは世を欺き人を欺く一個の假面に過ぎぬ。其の目標とする所は實は受くる結果の均等若しくは略々之に近しとするものでなければならぬ。即ち今日社會運動の根基をなすものは理想としての、結果としての平等主義でなければならぬ。(5)

(5)後出平等主義の一考察參照

アントン、メンガーは生存權を主張して Man kann das Recht auf Existenz so bestimmen, dass jedes Mitglied der Gesellschaft einen Anspruch hat, dass ihm die zur Erhaltung seiner Existenz notwendigen (die zur Führung eines menschenwürdigen Daseins erforderlichen) Sachen und Dienstleistungen nach Massgabe der vorhandenen Mittel zugewiesen werden, bevor minder dringende Bedürfnisse anderer befriedigt werden. (6) と云ふて居るが、之を徹底的に實行するに際して起るべき技術上の難問、例へば何を以て ein menschenwürdiges Dasein とするか、何が minder dringende Bedürfnisse なるや等の事は措いて問はずとしても、結

極に於て die Bildungsmillionäre sind „einem demokratischen Gemeinwesen kaum minder gefährlich als übermässiger materieller Reichtum“(7)と云ふ樣な見地から„ der demokratische Charakter des volkstümlichen Arbeitsstaates wird davon abhängen, dass die Befriedigungsmittel für die hierarchisch höchsten Bevölkerungsschichten (無論限定したる意味に於ける) das Mass der blossen Existenzbedürfnisse nicht allzu sehr übersteigen.“(8)又は„ In volkstümlichen Arbeitsstaat“ könnten „die feineren Bedürfnisse der höheren Bevölkerungsschichten erst dann befriedigt werden, wenn zuvor allen Staatsbürgern die Führung eines menschenwürdigen Daseins gesichert ist“(8)の如き結果の均等主義を主張するものとなつてしまうのである。況んやメンガーの主張する如く生存權を導入する社會に於ては其の成員は全部畢つて一樣に行政當局の命ずる所に從つて勞働義務を有すべしとするが故に Goethe 近松の時代に行政當局の許可あるに非ずんば足其の鄕土たる社會を踏み出すことも能はざることもあるべく(9)之を工場の勞働に充てしむるに刑罰を以て臨むこともあらん。(10)此の如くんば生存權は寓人に其の生存の權保を與ふべしとす

る美名の下に寓人を驅つて惡平等ならしめんとするものである、人格の獨立を滅却せんとするものである。勿論メンガー自身は社會主義を共產主義と區別して享樂財は其の一定組織の條件の下に於ては、各人の慾望を參酌して或程度迄不平均の分配を許すべしとは、彼の著書中處々に主張するところであるとしても(11)結果の均等主義を力說し之を目標とする以上は、論理の當然として理想としての平等主義を主張するに非ずんば其の趣旨徹底しないと云はなければならぬ。

(6) Anton Menger, Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag. 4. A. 1910. S. 9.

„ , Neue Staatslehre. 3. A. 1906. S. 98.

„ , Volkspolitik. 1906. S. 58-9.

„ , Neue Sittenlehre. 1905. S. 76.

(7) Anton Menger, Neue Staatslehre. S 213.

又次の句を思ひ合はすべし

„die Unterschiede in Bildung und Kenntnissen auch“ werden sich„ im volkstümlichen Arbeitsstaate als eine

fruchtbare Quelle der ökonomischen Ungleichheit erweisen." a.a. O. S. 65.

(8) Menger, Neue Staatslehre. S. 100.

(9) Menger, Neue Staatslehre. S. 150.

(10) Menger, Neue Staatslehre. S 197.

(11) Menger, Neue Staatslehre. S. 22 ff. 80ff. 87 ff. 93 ff.

〃 , Neue Sittenlehre. S. 48. 76. 等

凡て社會運動の深き病根は高きを低めて之を平準化せんとするに在る。何故一個の當爲として凡ての低きものを絶對の高さに昂めて之を平準化せんとせざる。凡ての社會運動の眞義は此の絶對の高さに平準點を見出さんとして而かも達する能はざる永久の努力に在りと見るに於て、吾等は吾等の生活の意義を知り人生の悠久を悟り得べきてある。文化價値の實現が或一の人格によりてのみならず、凡ての人格によりて完成せられ即ち之に參與することを得と見るに於て、假令理論上形而上學的臭味を帶ぶるの缺陷は之ありとしても、確に信念として其の善き根據を有し得べきてある。然るに何ぞや惡平等の天地に蹋躇して社會運動の眞義茲に盡くとなすや。事實としての平等主義は事實其自身を裏切り、理想としての平等主義は終に人格を一個のGattungsexemplarとして觀察すべしとする形而上學的宗教觀に至らざれば止まぬ。文化の歸趨に顧みて余は生存權の哲學的根據を自然主義に於けると同じく亦平等主義に於ても之を見出すに苦しむ。

生存權論が價値哲學上人格主義の見地より見て其の妥當を主張し得るは此の如くして左の一點に止まる。

凡そ一個の文化價値が經驗的生活範圍に於ける當爲として見られ、凡ての人格は此の價値の實現に向つての過程に於ける價値生活の主體として解せらるべしと云ふならば、其の人格の生理的生存は先づ第一義として確保せられざるべからずといふは云ふ迄もなきことてある。一方に於て價値實現の過程に貢献せざるのみならず却つて之を阻害するものあるに、他方に於て價値實現の過程に上り得ざる程生存の根基が確保せられざるものあるに於ては、其の原因は

人爲的に之を除くべくんば之を除き、然らずんば先づ之に對して社會上の一權利として最低の根基を與ふべしとするは、文化價値を當爲として立つる生活範圍に於て正當に且合理的に要求すべき第一の根據である。即ち此の意義に於て社會の各員に對して生存權を與へ其の生存を確保するは各人格の價値生活に對して其の物質的根據を與へんとするものである。此の根據の上に立つて價値生活は初めて意義あり得べきである。即ち此の根據の上に立つて初めて凡ゆる人格は事實上連續的に上下に連りて當爲としての文化價値に對するを得べきである。而かも此の根據たる社會權を與ふることによつて意識的に一人格の價値實現を少しでも阻害して之を低きに就かしめんとし一切の藝術、一切の學問も民衆口腹の慾望の爲に犧牲に供し終つて顧みざらんとする如き惡平等主義は、吾等の生活をして無意義ならしめんとするものであり、正に文化の敵と稱すべきである。人類の價値生活を破壞して之を自然生活たらしめんとするものである。然らば即ち生存權は價値生活の根基を社會的に且事實的に與ふると云ふ意義と範圍とに於てのみ是認せらるべきものと謂はざるを得ない。

餘論――此の故を以て生存權を以て文化價値其自らと認むべしとする竊田博士の論は余不敏之を了解することを得ざるを憾む。此の立場の相違より余の所論に對して加へられたる同博士の論難に對して余は今此の機會を利用して簡單に答辯の義務を果したい。

文化價値の見解に關して余に對して辯駁を加へられたる博士の論文は二つある。一は「生存權の社會政策」（金井教授紀念論文集及び經濟學考證所載）及び「カント國家及法律哲學上論理主義經濟學」（三田學會雜誌第十一卷第十二號、第十二卷第一、二號所載後に「カント國家及法律哲學管見」と題して「經濟學論攻」に收む）である。後者は未完稿なるが故に措いて問はず前者に對してのみ論じたい。

博士に從へば余は「貨幣經濟の現經濟組織に順應して貨幣を以て文化價値と認むべしと云ひ」たりと云ふ。余の思ふ所は即ち異なる。猶アルトマンの

說を解して「經濟上に於て資本主義の現狀より打算して資本を以て文化價値と認むべしと云ふ」とするの恐らく著者の意に非ざるべきと同じ。余は反之貨幣を以て經濟學上諸概念の嚮導觀念として認むべしと主張するは即ち一切の經濟學上の經驗內容が玆に一個の概念的引繰り返へしを起すべきものとして、一切のものゝ代表概念として見得べしと解すれば、丁度文化價値なる形式的概念に相對峙すべきものである。生存權に限らず何等かの內容を文化價値に與ふることを否認する余自身が貨幣なる一經驗概念其の儘を以て文化價値なりと說くことは有り得べからざることである。而して此の如き貨幣概念により代表せらるゝ一切の經濟上の經驗內容が文化價値なる形式に對する其の不即不離の關係を形而上學に導くこととなしに如何に說くべきやは余は拙稿「極限概念としての文化價値」（本書に於て後出）なる一篇に於て其の解明を試みて置いた。若夫生存權一般に對して余は如何に考ふるかは本論を以て之に答へんと欲する。

又或論者の如く余の主張を解して經驗內容を無視して只徒らに論理上の形式のみを說くものとするは余を以て認識は只形式に依つてのみ成立すと考ふるものなりとでも思つて居るのであらうか。余が經濟學上の心理主義を斥くるは、之によりて認識乃至一個の經驗科學が論理上の形式のみによつて成立し得と說くものと同義なりとは如何にして解し得らるゝのであらうか。心理主義を排すると云ふは何故經驗內容を「拋棄」し之と絕緣して論理上の形式のみを說くものと解釋し得らるゝか。（山口正太郎稿經濟學に於ける論理主義と心理主義（國民經濟雜誌第二十四卷第一號所載）同上純論理派經濟學の立脚點と其限界（同誌第二十五卷第四號所載）同上經濟生活の意義（商業及經濟研究大正七年四月號所載）參照）

三

余が既に他の機會に於て述べた樣に(1)社會政策乃至經濟政策は經濟的文化價値なる規範實現の過程に對して一定の方向を與へ一定の結果を生ぜしめんとする意識的努力の總體なりと解し得べくんば、其の生活範圍に於ける各員に對して生存の確保を與ふる爲に之に相應する一個の社會權を認承すべしと云ふは、寧ろ社會政策の出發點にして其の目標にも非ず其の當爲にもあらざるべ

きてある。先づ其の社會の各員の生存事實確保せられて其の根據築かれたる上に於て初めて價値實現の過程は其の出發點を得べきてある。此の根據の上に立つて各人格而して全人格は遺憾なく各特殊の活動範圍に於て價値實現の過程に上り得べきてある。而して社會の理想としては此の如くして其の根據たる生活の最低限度が順次に一齊に昂まりて、其の窮極に於て其の內の或人格によりて成し就げられたる價値實現の內容が普遍的妥當性を得べしとし、進むては一個若くは數個の人格のみならず其の社會中の凡ての人格が一齊に之に參加して依つて以て實現されたる規範の內容が事實上一般的となるのみならず又論理上眞に普遍妥當性を具有すべしとする所に在る。此の如きことが單純に理想たるに止まり一個のカントの意味に於ける Idee なるべきは當然であるが併し凡ゆる政策の根基は玆處に在らねばならぬ。人生を價値生活と解し其の價値實現に對する意識的努力によりて或特定の方向を與ふべきことを許すものは其の窮極の根基を玆處に有さねばならぬ。此の當爲たる文化價値に對しては各人格は其々に其の各々の處を占むべきてあるが故に、苟も之を平準化し凡俗化せんとする努力は文化の發展を茶毒するものてあり、價値實現を阻害して自然生活に復歸せしめんとするものてある。凡ての社會主義的運動の缺陷は玆に在る。會々生存權論が其の徹底的主張に於て凡ての人格を平準化せんとする惡平等主義に其の論據を有せんとするは、是聽がて此の點に於て其の哲學的論據を發見することを得ざるを示す所以てある。凡ての人格を目して自然科學的概念の一 Gattungsexemplar に等しきものとせんとするものなることは價値に生きんとする吾等の到底堪ゑ能はざる所てある。十九世紀の自然科學勃興と相俟つて更に其の意義を新にし來りたる經驗主義、實證主義、唯物主義、自然主義、心理主義に對しては「カントに歸れ」と叫ぶ聲を大ならしめ、玆に新カント派の勃興を見、延いて人文諸科學の論理的基礎を與ふることから遂に文化價値の哲學の樹立を見るに至らしめたのは思想の發展上寧ろ事理當然のことに屬する。此の如き狀態に於て今纔に生存權の論理的根據として擧げ得べき

ものは畢竟十八世紀末以降十九世紀中葉に至るまでの思潮の遺物たる自然主義乃至平等主義に過ぎない。價値哲學の見地に立つての生存權の根據は亦自ら此等と面目を異にするものがなければならぬ。之によりて其の意義と其の限界とが明に決定せられねばならぬ。

(1) 拙著改刷經濟哲學の諸問題第一二三頁以下

生存權は此くして如何なる意義に於ても文化價値其自身ではあり得ない。生存權は文化價値の實現に對して社會的に且事實的に最低根基を與ふると云ふ範圍及び意義に於て初めて言葉の意味すらがある。反之文化價値は形式として、規範として、當爲として經驗內容たる各生活範圍の問題を示す一個の Idee である。此の兩者同じからず此の兩者の間に隔りあるは、抑々價値實現の全過程が其の中間に介在すべきものなることを示す所以である。生存權の意義は茲に盡く。而かも其の實行に於て此の如き根基すら現今の社會に於て未だ置かるゝことなきは吾等をして唯々痛嘆に堪へざらしむるものあるのみ。此の意義に於て生存權論者の努力は吾等の多大なる尊敬と感謝とに値するものなりと云はざるを得ない。此の如き社會權の一日も早く世に一般的に認めらるゝを希ふは人道の見地よりして當然の要求である。而かも之が一般的に行はるゝことの爲に其の結果誤まれる自然主義より延いて自由人格の完成を阻害する如き惡平等主義に陷るに至るべきことに向つて力强き反抗の聲を放たんとするは、價値哲學の見地よりして避くべからざる論理上の權利なりと信ずる。生存權を認承するは社會的に生存する各人格而して全人格の價値生活をして抑々意味あらしむる出發點也。目標は反之此の出發點に立つて規範實現の過程を通じて遙に前方に望み得べき文化價値即是也。此の間の消息を明にし價値生活としての人生の意義を悟らしむるものは文化價値の哲學であり、所謂社會哲學換言すれば廣義の歷史哲學は此くして新なる解釋を得べきである。知らず何れの日か、何れの國か、第二のフキヒテを出だし第二のヘーゲルを生むや。歷史哲學は今や當さに哲學上の巨人を要しつゝある。(七、一一、三)

平等主義の一考察

（「我等」第一卷第四號所載同題文訂正）

自由、平等、悌愛は人も知る佛蘭西大革命の三標語であつた。十九世紀から二十世紀にかけての社會的文明は、着々として此等標語の實現に向つて進みつゝある。

中に就き悌愛は一個の倫理的訓言として見らるべきものである丈、一方に其丈何人によつても承認せらるゝと同時に、他方其の實現は殆んど永久に不可能である。所謂德を好む色を好む如くなるを見得ざるを嘆ずるのは、孔子の書のみではない。人種差別の最も著名なる學說を樹てた人は、人も知る佛蘭西のゴビノーであり、實際の政策に其の差別の最も顯著なる例を提供したるものは自由の國英吉利であり、共和の國北米合衆國である。換言すれば悌愛の德なくとも自由の社會は形ち造くられ、平等の世は實現せらるとなすものなりと佛蘭西の人、英吉利の人、亞米利加の人は稱ふるなりと云はれても一言もあるまい。此の如き實狀の存するは、即ち三標語中悌愛を以て其の內容他の二に比し甚だし

く空漠を感ぜしむとなす所以である。

自由は社會上の結果に於て動もすれば放恣と混ぜらるゝの恐がある、無檢東と同ぜらるゝの憂がある。之に代へて此の啓蒙時代の一標語に意味深き根基を與へ、依つて以て之を其の思考の中心點となし得たものは百代の鴻儒カントであつた。今日如何なる思想を此の「自由」に結び付けんとするものでも、其の人單純なる獨斷家に非る限りは、カントを顧みることなくして「自由」につき何物をも語らんとするの學的勇氣を有するものは恐くあるまい。自由は此くしてカントによつて放恣、縱逸より救はれたりと謂つべきである。其の實際の效果の大なるは言はずもあれ、言論の自由、結社の自由、信教の自由の如きは抑〻末である。自由の中心點は人格其自らにある。人格の自由に想ひ到り得るものにして、初めて社會上、政治上、經濟上の凡ゆる自由に其の深き意味を探り得べし。

平等に至つては甚だしく此等と其の趣を異にして居る。悌愛の如く內容空寂たる一倫理的箴言に止まらない。さりとて未だ自由の如く大なる思想家に救はれたる思考の中心點にも昇り得ない。吾等の時代を去る一百有餘年の昔の儘に幼稚な思想に偉大なる結果の發露を委しつゝある。ヴオルテーヤと共に再びTous les hommes sont nés égaux と、又米國獨立宣言書の冒頭の一句 All men are created equal と今日疾呼するものありとすれば、思想上未だ悉く啓蒙時代を味讀、體驗せざる我國の思想界、殊に目下朝野の問題たる普通選擧を、利弊相伴へる政治上の一制度として考ふることより全く離れて、感情上端的に享け納るゝに吝ならざるべしと思はしむる如き我國の思想界に於ては猶ほ幾多の共鳴と反響とを喚び起すことであらう。「平等」は余輩寡聞東西を通じて未だ何等の之に應ずる思想上の試練を經て居らぬ。澎湃として寄せ來る平等主義の濤を乘り切るべく殊に我國の思想界はあまりに用意が缺けて居る。

王侯將相寧有種乎の一句の裡に十八世紀より廿世紀に亘りての凡ゆる社會運動は其の中心點を見出し得。政治上、經濟上、社會上の最近世紀に於ける變轉の跡を其の例證として擧げんとするには吾等は餘りに其の事例の多きに苦しむであらう。余は此の思想を呼んで假りに「事實としての平等主義」といふ。其の意凡て人は生れながらにして平等なり、イースト、エンドの兒童を育くまるゝに、侍んべらるゝにバッキンガムの宏壯と儀禮とを以てすれば即ち吾等は其處にプリンスを見得べしとするの思想は、いふ迄もなく事實としての平等を主張す

るものである。生物學上或は法律學上凡ての人は平等なりといふとは其の言葉相似て其の意之とは大に異なる。此の場合に於ては凡ての人は悉く一定の思考の表面に持ち來されたるものである(概念的平等主義)。そが凡て平等なりや否やは其の一定の表面に持ち來たさるゝ事の如何其自身が問題の中心點となる。恰も人格なる一個の概念に對してはは我も他も全く同じなりといふは、其の間に面貌の異なる、性質の違へる、賢愚の差あるも、そは悉く人格なる概念に對する我と他との關係に於て全くirrelevantなりとすればである。此の如き平等は謂はゞ自然科學的概念構成に似たる一定の思考の表面に持來たすことを得との意味に於て初めて主張し得べし。恰も勞働に貴賤なしといふことの眞なるが爲には、あらゆる差異を其自身に含む勞働を、ある一定の思考の平面に持ち來すことの可能なるを意味せねばならぬ。之に反して「人は生れながらにして平等なり」とする場合には人は如何なる表面に持ち來されたるか。恐くは考へ得べき凡ゆる思考の表面に持ち來さるゝ事を思ふか、然らずんば謂はゞ全く何等の表面にも持ち來されざるものを思ふにはあらぬか。何れにするもそはノンセンスならずんば思考上の不可能事である。何となれば凡ゆる表面に持ち來たすといふこと其自身先づ第一に不可能なるは玆に敢ていふまでもない。が併し假に百歩を讓りて之を可能なりとするならば、最後に彼、我終に何物をも分つ所以なきに至らねば止まぬべきであるが故に、此くの如くんば彼我既に分れて存するの最初の動かすべからざる事實其自らを否定するか、然らずんばそが持來たさるべき何等かの意味に於ての平面あることを要せずと斷定するものでなければならぬ。換言すれば此くして彼我分れて存するてふ單純なる最初の事實を認承せざる背理に陷るか又は此の如き原始事實の、何等かの意義に於て無視せらるべき謂はゞ概念的平面の先天的否定を主張するものとなるか、何れにしても非常な事實的又は論理的獨斷論となり終らねば止まぬ。此の如くして人は生れながらにして平等なりといふことが所謂此の如き平面の何物の上にも持す來さるゝことなしと主張するものならば、是ぞ謂ふまでもなく直接經驗界の「物其自身」につきて云爲するものであつて、此の界につきて一定の立言をなさんと欲するものである。然らば是亦此の意義に於て一個の非常なる獨斷論といはざるを得まい。

假りに此の如き嚴重なる論理上の吟味を離れて單純に常識の面に立つとし

ても、猶且彼と我とを分つ何物かを心に會得せざるべからざるに、而も目を閉ぢて彼を以て我となさんとし、我を以て彼と爲さんとす。奇しき哉、論理の混亂。怪しき哉、思考の矛盾。否、事實としての平等主義は實は或ものゝ前提に過ぎずと解すべきである。論理の峻嚴を粧はんが爲に其の論の大前提を拔處に求めたに過ぎない。即ち心の内に平等ならんと欲するの希望あるが爲に、之が論理上の認承を得んとして不知不識事實としての平等主義を稱へしむるに過ぎぬ。敵は本能寺に在り。目指すは享くる結果としての平等である。我獨り卑うして、低くして、彼能く貴くして、高かるべきは我が感情の許す所に非ず、我が希望する所に非ず、彼我處を變へしめんと希ふは、凡ゆる平等主義の根基たり、其の本源である。唯其の間論理の進行に人間らしき粧をなさしめんとするの要求あるは、即ち事實としての平等主義を產みたる所以である。余は此の如き事實としての平等主義を論理の前提として要求するものを名づけて、之と區別するが爲に「結果としての平等主義」といはうと思ふ。

概念的平面の上に凡ての差異が平等化せらるゝことは既に見たる通りである。法律の前に凡て人は平等なりといふ如き、人類としては彼我平等なりといふが如きは皆元來平等ならざるものを或る一定の平面に持ち來すことを意味し一個の技巧を包含するものである。其の反證として法律の前に於ても凡ての人は平等ならざることもあり得れば、又平等ならざるの例は實際現今にも數限りなくある。人類としても其の言葉の意味の限定如何によつては、勿論平等ならざる例には決して乏しくはない。事實としての「概念的平等主義」は此の如くして一個の技巧に過ぎないといひ得る。併しながら此の如き一個の技巧を含める概念的平等主義を前提としたる場合に、之より引出さるべき結果としての、願望としての平等主義の意味は然らば如何なるべかきを問ふて見よう。例へば人は生れながらにして法律上平等なり、故に參政權行使の上に於て、將た私法上の權利遂行に於て、彼我の間に差等あるべからずといふものありとすれば、そは畢竟單純に其の論の前提とするものゝ實現を願望するに過ぎないといふことを意味する。何となれば此の如きは一旦言葉を換ゆれば、人は生れながらにして法律上平等なり、故に凡ての人は公法上、私法上即ち法律上平等ならざるべからずといふ如き無意味な繰り事に過ぎなくなるからである。人は生れながらにして法律上平等なりといふことが假に論理上意味あるものならば、其の

意味に於いて既に凡ての人は平等である、何ぞ人は公法上私法上即ち法律上平等ならざるべからずと改めて要求するの必要があらう。恰も生物學上の人として此の一定の概念的平面に於て彼も我も人なりとして平等なりとすれば、此の場合に於て我等悉く人なりと改めて主張するの畢竟無意義なるに等しい。

素より凡て人は其の限定の意味、平面に於て平等なる事が其の論の前提ではないか。此の故に結果としての平等主義を眞實ならしむべく要せらるゝ論理上の前提として謂ふ所概念的平等主義を擧ぐるとすれば、そは結果に於て前提の單純なる繰返しに過ぎないといふことになる。然らば此の如き前提として受け納れらるべきものは吾等が最も初めに顧みた「事實としての平等主義」でなければならない。即ち大まかに凡て人は生れながらにして平等なりといふことが、あらゆる結果としての、願望としての平等主義の論理上の前提として確立されねばならぬ。而かも此の如き純乎たる事實としての平等主義は論理上のソンセンスなるか又は不可能事なるか若しくは非常な獨斷論に過ぎないといふことは前既に吾等が見たる通りである。即ち之も亦結果としての平等主義に對して論理上の前提たり能はぬ。

然らば願望としての、理想としての、結果としての平等主義は前提としての、事實としての平等主義から全く絶縁して考へられねばならぬ。即ち平等ならんを欲する一個の單純なる希求として考へられねばならぬ。此の兩種の平等主義の間に論理上の連鎖を考へんとすることは許されない。

十八世紀末以來の凡ての社會運動は民衆の貴族に對するもの、無特權階級の特權階級に對するもの、勞働者の資本家に對するもの、貧者の富者に對するもの多數の少數に對するもの、壓迫反抗の歷史である。而して實に其の勝利の歷史である。結果としての平等主義は此の如くして著々其の實現に向ひつゝある。併しながら此の多數對少數の爭鬪てふ單純なる事實は結果としての平等主義の願望、要請、希求する所が常に消極的の色彩を帶ぶることを看逃がしてはならぬ。茲處に余が所謂消極的とは、何等か傳來の意味に於て高きを低めて、常に而して只管に、平準につかしめんとする事のみを其の一途の目的とするものを意味する。高きにあるものを低きにつかしめ、隙あらば或者と、つて之に代らんとするに對しては余は常に「お山の大將」を想はざるを得ない。幸にして大將引きずりおろされ、お山の麓に組みつ數かるゝ雜兵を見るに及むで人文の極致此の

裡にありとは何の囈語ぞ。若夫れかけ上ぼれる大將の甲なると、乙なると、丙なるとは文化の歸趣に照して畢竟何の意味ぞ。皇帝其の紋を換へて大統領となり、公、侯、伯、子、男其の稱を改めて勞働組合幹事長、理事長となる。河原乞食其の名を變じて委員長となると何れぞや。況んや何れを見ても山家育ち、御役に立ちそうな賢せ首もなき嘆聲を我が學問に、我が藝術に、我が宗教に、我が法律に、我が經濟に、我が技術に、將た我が政治に發せざるべからざるに至るを以て人間文化窮極の運命なりと觀ずべし、又かゝる運命を實現せんと努力するに於て人生の意義茲に盡くとなすは所謂社會改良論者、革命論者當さに血迷ふたりといふべし。

余は之を呼んで「惡平等主義」といふ。多數弱者の挑戰によつて起る階級鬪爭は其の階級に屬するもの又は屬すと感ずるものの間に是認せらるべきは、猫ほ猫の鼠を捕へんとするが如く、又窮鼠の却つて猫を嚙まんとするが如し。ベルトランド、ラッセルを俟たずとも爭鬪は畢に衝動的のみ。然れども猫鼠に非ざる吾等人間には猫斃れて鼠動き、鼠死して猫活くるを見るも、一滅して他之に代はる以外何の事象かあつて目に映ずる。況んや猫鼠其の屬を同じふするに至つて悉く猫となり、悉く鼠となるを見て吾等は何と思ふべき。余は惡平等主義を以て文化の歸趣なりと認むべき理由は斷じて發見し得ない。（前出「價値哲學より見たる生存權論」參照）

否、新世紀の平等主義は新しき目標を求めねばならぬ。而して此の目標に進すべき新しき出發點を求めねばならぬ。是余が近者「文化主義」の名に依つて敢て提唱せんと欲するものに外ならない。（後出「文化主義の論理」參照）即ち彼我の分かるゝ單純なる原始事實を平等化する高次の意味に於ける最後の平面を求め得んとするものである。換言すれば彼我の單純に分れて存する平面に於ける凡てのものゝ算術的合計以上の綜合によつて生する最後の、凡ゆる差異を其自身に內在せしめ得たる人格の平等化を可能ならしむべき高次の平面を提供し得べきものありとすれば、而して之を呼ぶに猫且平等主義の名を以てし得べくんば、余は之を以て唯一の可能なる而して正當なる學的認承を要求し得べき平等主義なりと信ずる。而して此の如き立場は形而上學的宗教の立場を離れて猶ほ sub specie aeternitatis に考へ得べしと信ずる。文化價値の哲學は茲に其の根據を据へつゝあるものである。

此の場合に於ける最後の平等化の平面は、技巧を其自身に含む而して此の故に內容を超絕せる立場よりして與へられたるものではあり得ない。內容其自らが窮極に到達して平等となり、其自身に連りて一個の平面を形造るものでなければならぬ。即ち思考上の差別を透して、之を絕して內容、形式合一の境地に到り得た時に初めて見らるべきものである。論理は論理を透して而して之を絕して其の根元に還り差別は差別を透して而して之を絕して其の本地に復す。之れを平等といふ。論理は直觀と相對して之と續き、差別は平等と相反して之と連なる。差別主義の上に立つ平等主義に非ずんば眞の平等主義に非ずと謂ふの意義は玆にある。平等主義とは單純なる無差別主義を意味するのではない。

世界大戰以後の大革命が齎すべき二十世紀社會運動の中心點としての平等主義、民主主義は社會哲學としての文化主義に其の基礎を有するものに非ずんば、恐くは永久に學的認承を要求する權利に與ることなくして終らねばなるまい。敢て問ふ、世の平等主義を說くもの、民主主義を稱するもの、果して余と其の見るところを同じうすべきや、否や。（八、二、一〇）

文化主義の論理

横濱貿易新報（大正八年一月廿三日——廿六日發行）
及び黎明會講演集第一輯（大正八年三月一日發行）
所載同題文訂正

『文化主義』の論理

諸君、今回三宅老博士を始め吉野、福田其他の諸先輩に依て我國にも黎明運動が開始せらるゝの機運に際會し、今夕（大正八年一月十八日）は我が黎明會(1)第一回の講演會として此處に諸君に見ゆるに至つたのであるが、余にも亦此等の諸先輩の間に伍して一場の學術的講演を試みよと云ふ幹事からの命令である。諸君が見らるゝ通り余は此種の講演會に於て何事か喋ると云ふことは、甚だ不得手でもあるし、又余自身それに於て多くの欣びを持たないものであるが、それにも拘らず余が之を敢てしなければならずと思ひ又敢てする程余は我國に於て黎明運動の必要なることを認めるのである、又それを急務なりと信じて居る。併し諸君の燃ゆるが如き青春の血に油を注がんとするやうな熱辯を揮ふことは余の任とする所でないから、余は余の立場から考へて、余が茲に假に名づけて『文化主義』と稱する一個の人生觀に對して、氷の如き冷かなる論理的解剖を加ふるを以て滿足したいと思ふ。或は此の如き講演をなすといふことは今夕の聽講者諸君の多數

の方々の心構には反することとも思ふが、學校の講堂で三四十分間講義を聞くと云ふやうな心持で暫くの間聽いて戴きたいと思ふ。

(1) 黎明會の大綱三則左の如し

一日本の國本を學理的に闡明し世界人文の發達に於ける日本獨特の使命を發揮すること

二世界の大勢に逆行する危險なる頑冥思想を撲滅すること

三戰後世界の新趨勢に順應して國民生活の安固充實を促進すること

一

官僚主義、保守主義、軍國主義を排して民主主義、進歩主義、自由主義に與みするものは、其の論據は前者が後者に等しからざるの故を以てなりといふことにあり能はぬ。猶ほ官僚主義、軍國主義が民主主義、自由主義を斥くるの根據は、後者の主張が自己の主張に合せぬといふこと自身の理にあり能はぬといふの明白なるに全く同じである。Aの主義がBの主義を排するはBのいふ所Aに同じからずといふこと其の事の理にあり能はぬはいふまでもない。世に行はるゝ論議を仔細に檢したるとき其の多くは然るが如く、もし此の意味以外に民主主義又は民本主義が官僚主義、軍國主義を排するの根基なしといふならば、其の論全く論理上の用意を缺いて居るといはねばならぬ。Aの主義を排しBの主義を採り又はBの主義を斥けてAの主義につかんとするには即ちA其のものにもあらず、又B其のものにもあらぬ立場に在つてA及びBを顧みるものでなければならぬ。而かも此の如き第三の立場は一方A、Bの如き內容を超越すると無論でありながら他方又此の如き內容に密接の關係がなければならぬ、此等の內容と全く絶緣されてあつてはならぬ。換言すれば此の如き立場は、批判哲學の語を藉りて曰へば、內在的にして而かも超越的ならざるべからずといふことが出來る。今官僚主義、保守主義、軍國主義乃至民主主義、進歩主義、自由主義を論ずるものにして其の一を排して他に與みせんとするものが、其の論ずる所をして論理的に有意義ならしめんとするならば、今言ふた意味に於て此等の主義に內在的にして而かも此等の主義を超越する立場を見出すことを得るもので

なければならぬ。然らずんば其の論ずる所は一場の根據なき感情論に終らざるを得ない。所謂世界の大勢は一片の感情論で動くかも知れぬ、只冷かな論理的頭腦は假令一個でも感情論では動かし得ない。

然らば此の如き立場は何か。

惟ふに今吾等が當面の問題とせる一主義を貶して他主義を擧ぐるに當つて、此の如き價値判斷をなすに必要なる論理的「アプリオリ」たる規範、當爲は、此等の內容が依つて以て上下の階層をなして一義的に一列に配置し得べき樣の目標でなければならぬ。即ち此等の內容たる諸主義を或一定の觀點から見て之を純化しつゝ進む過程の窮極に立てる一個の「イデー」でなければならぬ。余が他の機會に於て述べた語を藉りて曰へば、此の如き「アプリオリ」は內容を純化する過程に於て其の一方的高昇の極限概念として見らるべき「イデー」であり「ゾルレン」(當爲)であり「ノルム」(規範)である。(後出「極限概念としての文化價値」參照)此の意味に於て「アプリオリ」を認容する思想が古希臘の形而上學的傾向を除いて「プラトーン」のイデヤ論に其の新しき意味を認めたヘルマン、コーエンの主張を諒とすべきは蓋し意味あることである。此の如き「アプリオリ」が立てられ、凡ゆる文化史上の主義は之に照されて價値の判斷が行はれ、或は此の如き「アプリオリ」を實現すべき使命を有するものとして、或は之を阻害するものとして、一を採りて他を棄つべしとの根基が適確となることを得るのである。頑冥思想を撲滅すべしといふも、其の意永久に頑冥思想が心理的事實として一部の人々の間に抱かるゝ事を否み得るものではあり得ない。只頑冥思想が心理的事實として存在するとしても文化史上何等の使命を果たすことを得ず、文化史の思想的表面に擡頭するを許さゞる論據が別に儼然として存することを意味するに過ぎない。此の如き「イデー」あつて此の如き「ゾルレン」あつて吾等の現今の社會が有する各般の主義は一々之によつて其の文化史的價値の判斷を受け、或ものは吾等を文化の極致に導くを阻害する所以なりとして之を撲滅せざるべからず、或他のものは反之歩一歩吾等を文化の歸趣に近づかしむるものなるが故に之を育

露光量違いの為重複撮影

成せしめざるべからずとして、其の間に取捨選擇を可能ならしめ、依つて以て吾等が有する人文の趨く所を察せしめ且之を悟らしむることを得べきものである。逆言すれば吾等が有する人文史上の諸價値を純化し一方的高昇の過程を極致に導きたる時、其の極限に立つて吾等が人文史上の凡ゆる努力に對して其の目標となり得べ[illegible]る。余は今此の如き論理上の普遍妥當性を[illegible]力を呼んで[illegible]

(1)「文化主義」の命名に[illegible]

所謂文化とは自然に對する語である。[illegible]べられたる自然の事實を或一定の規範に照し之を[illegible]に於て其の理想とする所を實現せんとする過程の全體を稱して吾等は之を文化と呼ぶ。之を其の內容につきて見[illegible]各限られたる範圍に於ける一方的努力の過程に於ける所產は即ち吾等が呼んで藝術となすもの、學問となすもの、宗教となすもの、道德となすもの、

技術となすもの、法律となすもの、經濟となすもの[illegible]である。即ちこれ等の文化財(Kulturg[illegible])は文化生活全般の裡に於ける一方的努力の所產である。其の各々が或一定の規範實現に對して相互に補充的に且協働的に各々固有の使命を有するものなりとの意義に於て、即ち之を通俗的に云へば有機的の組織をなすものなりとの意味に於て此等の文化財の總體を呼んで吾等は之を文化と稱するのである。此の如き文化は價値實現の過程なりと見らるゝに於てのみ其の全き意義が存する。かくして初めて自然に對峙するものとして其の意味を有し得べきである。反之文化の歸趣、文化の目標、依つて以て文化をして意義あらしむる當爲は即ち文化價値である。一切の人格は此の如き文化價値實現の過程に於て一以て他に代置し得べからざる其自らの價値を保有し得と見らるゝに於て、語を換へて曰へば一切の人格は文化の生產、創造にたづさはることによつて其自らの重要と價値とを發揚するに於て其自身固有の意義が見出し得らる。人格とは文化價値と相對してのみ意味がある。文化價値は其自らの論理を內

露光量違いの為重複撮影

成せしめざるべからずとして、其の間に取捨選擇を可能ならしめ、依つて以て吾等が有する人文の趨く所を察せしめ且之を悟らしむることを得べきものである。逆言すれば吾等が有する人文史上の諸價値を純化し一方的高昇の過程を極致に導きたる時、其の極限に立つて吾等が人文史上の凡ゆる努力に對して其の目標となり得るものは所謂文化價値即是である。余は今此の如き倫理上の普遍妥當性を具有する文化價値の內容的實現を希圖する謂はば形而上學的努力を呼んで茲に『文化主義』と言はふと思ふ。(1)

(1)『文化主義』の命名につきては本稿末尾附記參照

所謂文化とは自然に對する語である。何等かの意味に於て與へられたる自然の事實を或一定の規範に照し之を純化し、窮極に於て其の理想とする所を實現せんとする過程の全體を稱して吾等は之を文化と呼ぶ。之を其の內容につきて曰へば、各限られたる範圍に於ける一方的努力の過程に於ける所產は即ち吾等が呼んで藝術となすもの、學問となすもの、宗教となすもの、道德となすもの、

技術となすもの、法律となすもの、經濟となすものである。即ちこれ等の文化財(Kultur)は文化生活全般の裡に於ける一方的努力の所產である。其の各々が或一定の規範實現に對して相互に補充的に且協働的に各々固有の使命を有するものなりとの意義に於て、即ち之を通俗的に云へば有機的の組織をなすものなりとの意味に於て此等の文化財の總體を呼んで吾等は之を文化と稱するのである。此の如き文化は價値實現の過程なりと見らるゝに於てのみ其の全き意義が存する。かくして初めて自然に對峙するものとして其の意味を有し得べきである。反之文化の歸趣、文化の目標、依つて以て文化をして意義あらしむる當爲は即ち文化價値である。一切の人格は此の如き文化價値實現の過程に於て一以て他に代置し得べからざる其自らの價値を保有し得と見らるゝに於て、語を換へて曰へば一切の人格は文化の生產、創造にたづさはることによつて其自らの重要と價値とを發揚するに於て其自身固有の意義が見出し得らる。人格とは文化價値と相對してのみ意味がある。文化價値は其自らの論理を內

在的に含み得る客觀であり人格は之をして抑々意味あらしむる主觀である。人格なきの文化價値はなく、文化價値なきの人格はあり得ない。文化價値に對せざるものは自然人であつて、人格は唯文化人に存するのみである。此の如き意義に於て解せられたる一切の人格が、文化價値實現の過程に於て假令其の中の一個でも其の過程の表面以下に埋沒せらるゝ事なく、悉く皆其の表面に於て其自身固有の位置を占め、一義的且一律的に一列に配置せられ、而して其の窮極に於て儼として目標たり規範たる文化價値が立ち、而かも其の有する論理的普遍妥當性が此等一切の人格によつて事實上にも內容的に實現せらるゝことを求むるものは即ち余が玆處に提唱せんと欲する文化主義である。言葉を換ふれば文化價値の哲學を基礎として一切の人格、一切の文化を認承せんとする「ヒユマーニズムス」であり、人格主義である。

上既に述べた如く吾等が有する凡ゆる思想上の主義に對して其の取捨撰擇を可能ならしめ之をして論理上に根據あらしむるものは、此等の凡ゆる主義に對して內在的にして且超越的なるものでなければならず、凡ゆる主義を其根柢に於て味讀し體驗し得て而かも此等を超越したるものでなければならぬとするならば、此の如き立場、此の如き「アプリオリ」は今言ふた意味に於て解せられたる文化主義を措きて抑々何をか求め得べしとするそ。官僚主義、軍國主義、侵略主義、帝國主義を謳歌するもの、之を排するもの、民主主義、平和主義、自由主義、進步主義、非侵略主義を擧ぐるもの、之を斥くるもの、悉く皆此等の凡ての主義に內在的にして而かも此等の凡てを超越する文化主義に來らなければならない。來つて而して其の批判の規準を玆處に求めざるを得ない。此の見地に立つときは道義必ずしも重からず、藝術必ずしも輕からず、經濟技術に必ずしも厚きを要せず、學問に必ずしも薄きを要せず。玆に吾等は文明批評の根基を覓め得べきである。例――文化の「イデー」に殉じたる意味に於ては乃木將軍の殉死も、之に對する乃木夫人の死も、將又松井須磨子の情死も當さに最高の人生美を發揚したものといふべく、個人人格の絕對的主張として、其の行爲自身の天下に及ぼす

影響等の批判は別として、一は天皇に殉じ二は其の夫に殉じ三は其の情人に殉じたりといふように所謂天地宵壤も啻ならざる差はありとしても、余は等しく皆此等の行爲に對して限りなき尊敬の意を表せざるを得ない。此の意義に於て乃木伯爵家の再興はあまりに武士の情を知らぬ所業と思ひ、須磨子最後の希望に對しては一掬同情の涙を禁じ得ない。此くして保たねばならぬ家族制度ならば余は寧ろ其の崩壞を望む。此くして維持せねばならぬ風敎ならば余は寧ろ其の根本的變革を希ふ。吾等は道義の爲にのみ活くるのではない。吾等は「常識の民」としてのみ生きるのではない。況んや吾等は所謂成功せんが爲にのみ活くるのではない。吾等は文化の歸趣に朝せんとして文化價値の實現を努むる人格として活きんとするのである。各限られたる範圍に於ける文化所産の創造にたづさわる事を透して個人人格の絶對的主張に普遍妥當性を與へんとするに於て吾等人生の意義は盡く。文化主義とは是てある。人格主義とは是てある。

二

思ふて玆に至れば吾等の前途に輝く星の光を認め一途に進み行く吾等の歩武を止め又は發展を阻まんとし、或はあるが儘の狀態に妥協をなして惰眠を貪らんとする保守主義、退嬰主義、凡俗主義、常識主義乃至御都合主義や、平和の裡に價値生活の自由創造を期せんとするに反對して文明破壞を以て其自身の目的とし絶對の服從、犧牲を其の手段として要求する權力主義、帝國主義、軍國主義、侵略主義や、論理上の普遍妥當性を具有する文化價値を事實上內容的に實現せんとする努力に對して或は第三階級、或は第四階級の限られたる民衆の間に於てのみ妥當なる一部的民主主義、社會主義乃至革命主義や、更に其の範圍を縮少せしめて文化の負擔者を一部に限り其の狹隘なる人生觀を以て全部の人々に對して之を威壓せんと努むる官僚主義、軍閥主義、道義主義や、單に物質的成功を以て文化に對する貢獻なりと誤解し、煩瑣なる形式的生活に追隨するのみを知つて人生の意義を解するを忘れたる物質主義、功利主義、素町人主義や、皆排せざる

べからず、斥けざるべからずといひたい。

此の點に於て余は特に文化主義の民主主義(デモクラシー)に對する態度を定めて置きたいと思ふ。

軍國主義、官僚主義を斥けて民主主義を擧げんとする現今の風潮は、其の窮極に於て無資產階級、無特權階級の資產階級、特權階級に對する反抗の聲の一面を示すものである。十八世紀末以降、貴族僧侶に對する第三階級革命の成就に對して十九世紀後半二十世紀初頭に於ける第四階級反抗の一面である。確かに文化史上有意義なる運動たるを失はない。從來の廣義に於ける特權階級によつて日常の生活より延ひて其の人生觀に至るまで一般の民衆を支配して、謂はゞ皮想的に外部より附着したる特權の差異、有無如何によつて價値生活の過程に上り得るの資格を定められ、其の生活の文化的價値如何をすら決定せられたるに對して、無特權階級の解放を主張するは、確かに其自身正當なる固有の意義を有し、文化主義の根本主張に背反するものではあり得ない。併し此の主張の

貫徹によつて、特權階級の優越に代ゆるに單純に多數を占むる無特權階級の優越を以てするものならば、多數は常に少數より眞理なりとの立言が論理上に確立せらるゝに非ずんば、畢竟無意義であるのみならず、實際の結果としては誤まれる經驗主義、實證主義の主張より、延ひて文化生活を自然生活に復歸せしめんとするものに過ぎなくなる。特權階級を認めずして私有財產制度を認むるは矛盾なるが故に、私有財產制度を認めずとすれば論理上平等主義の上に立たねばならぬ。而して平等主義を認むるものは余が既に他の機會に於て述べた樣に(前出「價値哲學より觀たる生存權論」並に「平等主義の一考察」參照)事實上には各人平等に非らざるが故に遂に結果としての平等主義に到らざるを得ないで、其の極智識上に於てすら之を認めざるべからざる樣になり、畢竟余の所謂惡平等主義を主張するものとなつてしまはねばならぬ、そうして之が爲に一切の藝術、一切の學問を驅つて民衆口腹の慾望の犧牲に供せられ終らねば止まぬに至る。プラトーン、ゴエテ、カント、ニユートン、レンブラント、ベートホーヴエン、芭蕉、紫式部

を包含せざる第四階級の社會民主主義によつて、結局パンの問題の爲に此等一切の文化が其の足下に蹂躙せらるるを見るは到底吾等の忍ぶ所に非ず。事甚だ小に似たれども恰かも不必要なる交通便利の口實の下に江戸城三百年の綠翠が無慘にも伐り倒さるゝを見るのいたましさにも類するであらう。否、文化主義は此の如き民主主義に與みすることが出來ない。限られたる一部の人生觀を以つて全部に强ゐんとする官僚主義、軍閥主義を蛇蝎の如く忌み嫌ふ文化主義は、又民衆一般の假面の下に假令大多數なりとは云へ單に無特權階級を以て特權階級に代置せんと企つる社會民主主義を斥けざるを得ない。此の意義に於て吉野博士が本會(黎明會)開會の辭に於て(1)又福田博士が本年初頭の新聞雜誌上の論文に於て(2)共に獨逸流の社會民主主義を排するは吾が意を得たりといふべきである。

(1)及(2)黎明會講演集第一輯及福田德三著黎明錄並に暗雲錄參照

眞正の民主主義は無特權階級のみならず、現在の制度が存續するならば常に見らるべき樣の特權階級の凡て、即ち換言すれば一切の人格が文化價値なる規範の實現過程に於て、其の表面の上に各々其の固有の位置を占め得べきものでなければならぬ。即ち眞正の民主主義は Contradictio in adjecto を許すならば、差別主義の上に立つ民主主義でなければならぬといふべきである。而して此の場合に於て一切の人格が認承せらるることを要求するが故に、其の規範實現の過程の表面の下に埋沒せらるゝ如何なる人格も無きに至るといふのが理想でなければならぬ。限られたる民主主義の排すべきは尙官僚主義の排すべきと程度上の差こそあれ其の性質全く同じ。第四階級は十八世紀産業革命が產むだ一個の歷史的產物である。偶々百年來の歷史的產物を有する時代に生れたるが爲めに、官僚主義、權力主義、威壓主義、道義主義に代ゆるに勞働者主義、唯物主義、物質主義、功利主義、惡平等主義を以てせざるべからずとせば、恐くは數千年の人類の歷史に於て吾等ほど哀れなるものはあるまい。吾等の要求するは反之人格の自由である。自由なる人格の自己發展、創造である。而して是ぞ言ふま

てもなく文化本來の意義である。文化は人格の目的論的原理の完成せらるべき位置である。哲人(政治)主義、官僚主義、民主主義は此の目的に對する手段として考へられ得べき範圍に於ては是認せらるべき其々の根據はあり得る。唯だ之によつて大部分又は一部の人格を意識的又は無意識的に、規範實現の過程の表面下に埋沒せしむるに於て非難せらるべきものとなる。要は廣汎なる且深刻なる文化の諒解が求めらるゝからである。

三

茲に於て殘る問題は唯一つのみ。多數は少數に比して必ずしも眞理に非ず而かも一切の人格が價値實現の過程に上ぼり得ることを求むるの根據は如何。

余は其の論據を覓めて二を得たり。即ち一は文化の意味よりして能く唯一人格のみの關する所に非ずとする事により、他は此の如き內的性質を有する文化の歸趣が文化價値として、規範として、當爲として立つが爲に、余が他の論文(極限概念としての文化價値)に於て解明を試みた樣に、極根概念として見らるべきものとすれば、其の之に達する各成員、各要素を體化せる各人格は、例へば數學上或る數の極限に達する爲には其の系列の生成に於て無理數の位置も亦あるべきを要すると同じく、文化價値に達する方向に於て凡ゆる內容的差異を含む位置を發見し得べきものである。而して各人格の考へ得べき凡ゆる差異の根原は形而上學的「物其自體」を思はずとも非合理性の問題として吾等に殘され、又は文化價値の極限に導かるゝ一列の生成を合理化の過程と見るとしても、其の合理化的過程の上に價値上の差異を其自らに內在するものとして凡ゆる位置のあるべき事は當さに認承せらるべきである。所謂多數決の問題とは之に反して茲に所謂非合理性の合理化的表面に於ける同價値單位の集積の數の多寡如何といふことに過ぎぬ。此の如き意味に於ける單位の多數が少數よりも眞理なりとは其自身に論據があり得ないのは之によつて明白である。人格の核心に觸れざる表面に於て便宜問題、合目的問題としてのみ多數決は許さるべしといふ余の主張は即ち此の謂である。以上二の論據と意味とに於て多數は必ず

しも少數よりも眞理なりとは言ひ得ぬとしても、而かも一切の多數の人格が價値實現の過程に上り得るを要すとするの理は明かとなつたと思ふ。

此の如くして文化主義は凡ゆる人格が文化價値實現の過程に於て、夫々特殊の固有の意義を保持するを得、其の意義に於て何れかの文化所產の創造に參與するの事實を通じて、各個人々格の絕對的自由の主張を實現し得る事を求むるものである。此の意義に於て文化主義は人格主義である。而して此の如く各限られたる範圍に於ける文化所產の重要と地位、從つて其の創造に與かりたる各人格の文化所產相互に對する價値批判の標準は、例へば道義重きか藝術重きか等の標準は、余は各範圍に於ける文化の過程及び所產を調和、整正せる構成的部分として考へ得べき文化全般即ち文化價値一般を考ふることなくしては之を發見する事不可能なりと信ずる。進むでは又之を一個々々の各人格につきて見れば、人格の自由なる自己發展は、多方面なる且深刻なる領會を有する文化人を想ふヒユーマニズムスに到らざれば止まぬ。此の意義に於て文化主義は人本主義である。即ち一方に於て各人格は一部的文化所產の創造によつて其の全き人格を發揚し此くして一切の人格によつて相互に補充的且協働的に文化一般の意義を其の窮極に於て顯彰し、他方には各人格の內部に於ては其の各個々々の內に於て、凡ゆる文化の種類に亙りて廣き且深き領會を以て其の實現に向はんことを期するものである。共に文化價値を「アプリオリ」として立つる文化價値の哲學に基礎を有するものであつて、價値哲學は此くの如くして文化主義、人格主義、人本主義に其の論理的根基を與ふることが出來る。凡ての文化史上の思想及び主義は皆其の批判の根據を玆に仰かねばならぬ。一切の人格が差別の上に在つて而かも等しく一樣に文化の歸趣に朝すると見るに於て凡ゆる文明批評の根據がある。之によつて是認せらるべき民主主義でなければ眞正の民主主義とは言ひ得ない。

以上の意義に於て余は一部の人生觀を以て全部に强制せんとする軍閥主義、官僚主義を排すると同時に、眞正なる民主主義は階級的のものであつてはなら

ず、文化に對して廣き且深き理解を要求する文化主義の上に立つて基礎附けられねばならぬと信ずる。而して此の意味に於ての文化主義を遵奉し其の實現に努むるは凡ゆる文化人の努力に對して其の本然の意義を悟らしむる所以である。此の主義の上に立つことによつて初めて凡ゆる實際問題は其の正當の批判を受け得べきものとなる。此を外にしては一切の人文史上の主義主張は到底一片の感情論に終らねば止まぬ。（八、一、一八）

附記　余は玆に本文に述べたる如き人生觀を名づくるに際し、謂はゞ文化價値の實現を努むる主義とも云ふべき意味を含ましめて「文化價値主義」とも名づけやうかと思つたが寧ろ冗長の嫌ひあるを恐れて簡單に「文化主義」と命名して置いた。此の理由に依つて文化主義の名は少し漠然たるに過ぐる樣な感じの不安を抱きながら之を本文の中に採用したのであつた。其の後本主義に關して我が思想界は論難是非の兩論を聽くの機會甚だ多かつたが、其には余の微力は與からず、多くは我が學界の耆宿桑木嚴翼博士が公然「文化主義」の名に於て諸種の議論を公にし極力余の主張する所と根底を同〻ふせる獨逸理想主義に基く人生觀を高調せられ、更に金子馬治博士、土田茂學士等の大同小異の人生觀を力說せらるゝによつたもので、此の如くして終に文化主義の名も今はさして人に奇異の感を抱かしめざる樣にもなつた。唯だ併し乍ら其の中に就きて桑木博士の文中に「文化主義につきては數年來折々之を書いたこと」もあり（大正八年五月號丁酉論理講演集第二百一輯參照）且つ主義としてのみならず其の命名につきても「數年來折々其の言葉を用ゐて居るが他の人々の場合はいざ知らず私自身は唯自分の漠然考へて居る或る思想を言ひ現はす爲めに假りに用ゐて居るので全く自己の創造にかかるものである」（大正九年六月號雜誌「大觀」參照）とせらるゝに會して、余は一方に於て此の命名が必ずしも學問上不穩當のものではなかつたといふ一つの有力なる證左を得た喜びに安んずることが出來たが、他方には自己の初めて命名したる所と信じたものが既に他人而かも我が桑木博士の「創造」したものであるといふことを聞くに及んで、余は全く之を　らずして此の命名をなしたことにつきて何等かの機會に於て之を我が學界に向つて告ぐることは余の學問上の義務なりと思ふに至り、且つ

内に省みて自らの寡聞を深く恥ぢざるを得なかつた。今本論文集卷第二を編み本稿を再び世に出すに當つて、同博士の力を藉りて、既に本稿以前に同博士が此の命名を用ゐた論文を始めて檢することを得た。即ち余の本講演に先だつ二ヶ月、大正七年十一月に於て時事新報に寄せられたる同博士の論文（今は收めて同博士著「文化主義と社會問題」中にあり、題して「再び戰後の思想界に就て」といふ）に於て極めて簡單ながら「文化主義」の名を公然用ゐられたるものなることを明かにし得た。仍つて此の「文化主義」の名は學界並に思想界に於ては初めて桑木博士に依つて導入せられたるものなることを余は茲に聲明したいと思ふ。之によつて初めは多少奇異の感を抱かしめた樣な文化主義の名も獨り余の淺はかな創見に基いたものではないといふことを確め得たことを喜ぶ。勿論、文化主義の名に依つて言ひ表はさんとする人生觀其のものは啻に桑木博士の創造する所でないのみならず又勿論余の創造する所でもない、恐らく獨逸理想主義に其の根底を置く凡ゆる學徒、凡ゆる思想家の悉く抱懷せざるを得ざる所であらう。余が茲に附記して辨ぜんと欲する所は唯だ「文化主義」なる命名問題に關する。

（一〇、八、六）

價値生活としての人生

（日本及日本人大正七年秋季增刊號所載同題文訂正）

Vita brevis, ar-long.n を言ふもの、必ずや直に natura aeterna と思はざるを得ないであらう。自然の悠久に比すれば、人生は眞に覺めて果敢なき一場の春の夢にも等しい。而も人生を其の全部なりとする吾等は此の如き一片の比喩に吾等の思ひを托せんとするは到底堪ゆべからざる所である。想ひを遠く無限の世界に馳せ、之を立證し茲處に常住の定礎を得んとするは吾等にとつて到底止むことを得ざる形而上學的慾求である。

人生を有限、有定なりと觀ずるものは、其の前提として必ずや精神生活の無限を思はざるを得ざるべし、無限は有限の基なりとは好んで論理家の稱するところである。恰も世に眞理なるものあることなしといふ懐疑家に對して、然らば夫子の言ふところ、其すらも眞なりとする能はざらんといふと同工異曲である。論理として吾等に屈服を强ふるも遂に Eppur si muove!（しかはあれども大地は動く）

と呟いたガリレイのあの時の心事に共鳴を感ずるを禁じ得ない。否、人生の悠久に活きんとするものは、此の有限の人生に對する論理的必然的前提として、それを思はざるを得ずとする無力の消極的立證に滿足するものではない。有限より發足して無限を說かんとするものは恰もザイン(存在)よりゾルレン(當爲)を抽出せんとするものに等しい。此の如くんば爲んぞ能く到底有限ならぬ且無限ならぬものゝあり得べきや否やをすら知り得べきぞ。有限なる人生の裡にあつて無限を想ふは、因果法則の範疇に立つて意思の自由を說かんとするものに類する。立場の轉換を要するか然らずんば論理の權限超越である。

人生は有限なりや、無限なりや、其の意義如何、其の歸趣如何。此の如くにして要するに問題は哲學其自身の問題となり、其の解答は此の如くにして各哲學體系の細密なる舒述發展に待たざるべからざるの理も明となる。余や不學未熟猝かに人生を解し得たりとは言はない。唯々先哲フキヒテ、シエリング、ヘーゲルによつて發展せられたる歷史哲學は「文化價値の哲學」の確立によつて、人類文化生活に於ける各殼の努力に對して其の意義を宣明し其の歸趣を指示するに足るべしと確信しつゝある。只茲に余にとつての問題は、各文化價値相互の地位並に其諸文化價値の文化價値一般に對する關係如何といふことである。(1)換言すればカント、フキヒテの如く倫理的價値を以て、シエリングの如く美的價値を以て、ヘーゲル、コムトの如く概念的價値を以て人生の意義を定め人類文化生活の歸趣を繹ねんとするや、或は此等を凡て連續の關係に置かずして竝列の地位に於て見んとすれば、此等の凡てを統一に導くべき文化價値一般の意義は抑々如何なるべき。茲に新しき歷史哲學の問題は横はる。此の問題の解明あつて初めて吾等は宗教、哲學、藝術の意義を悟り、法律、政治、經濟、技術、道德、學問の歸趣に逢ふ事なきを得べきである。此くして初めて吾等は此等の價値實現に對する吾等自身の努力が如何なる意義を有すべきやを體得し得べきである。人生は到底不可解なりや否やは此の境に入り得たるものゝみの云爲し得べき特權に屬する。自然果して無限なりや、人生果して有限なりや。解釋は一に懸つて文化價値の批判にある。

(1)　後出「價値の體系」參照

ヘーゲルに從つて客觀價値と絕對價値とを分ち、之に對する文化價値の關係を闡明するは一個學問上の問題としても誠に興味多い。若夫此の如くして確

立せられたる意義に於ける文化價値が、無限より出でゝ無限に流るゝ「時」の關係に於て如何に之に倚屬し、如何に之に倚屬せざるべきやを見んとするは更に更に興味多い。

人生を以て自然界裡の一現象なりと觀察せんとするものに對しては、既にカント一百年の昔にあつて自然科學の論理的樹立により永久に其の意義を確定した。復た後人立つて片言隻語の之が爲に費さるべき要あるなし。唯世に弊辯駄辯を弄する學者、名士、宗教家多きのみ。人生を以て價値生活と解せんとするものは、カントによつて示され、カントによつて殘されたる問題の研究に於て皆其の志を同うするものである。其の異なる方向の數多あり得べきを知るは會々以て其の基礎を置きたる哲人の偉業に讃嘆の聲を惜しましめざらしむるものあるのみ。十九世紀を通じ而して二十世紀に亘りて竭能以て解決に從ふ思想家の問題は、要するに價値實現の過程として見られたる、價値生活として見られたる「人生とは何ぞや」といふ一問に過ぎない。

此の如く解せられたる人類の文化生活中從來の學者、思想家、實際家によつて一樣に誤まられたる解釋に於て安んじつゝあつたのは特に經濟生活に關する。之を輕視否無視して全く問題となさなかつたか、又は之を問題としても全く他に從屬せしめて來つたか、何れにしても他の文化生活に對立して毫も至當の考慮を與へなかつた時代は措いて問はず、十九世紀以降經濟生活の勃興を見るに至つて會々マルクスの之を以て凡ての社會生活の基調となさんとする極端なる說を見るに至るまで、未だ嘗て一として其が當さに問題の性質上要求すべき正しき思索を回らされたるものあるを聞いた事がない。おしなべて他の文化生活の準備階段にあるものとして觀察せられつゝある事が常態であつた而して常態である。此の如くにして人類の最も多くの部分が而して又各人の生命の最も多くの部分が、此の準備行爲の爲に費されつゝあるといふことが眞なりとせば、是當さに思想家の沈思を要求すべき問題とはならないか。換言すれば、經濟生活の歸趣が、余の屢々他の機會に於て稱道した如くに、超越的經濟的文化價値に示さるべしといふのであるならば、此の經濟的文化價値の他の文化價値に對する關係如何、竝列の關係にありや將又通說に從つて連續の關係にありや等を明にするは決して空理を喜ぶと見られつゝある學究の閑事業のみではあり得ない。當さに所謂經世家の心血を濺いで其の解決を見ざるべからざる活

ける併し幽玄なる根本問題である。

經濟生活に從ふものは經濟生活が所謂其の人生である。少くとも其の人生の殆んど全部を占むるものが大部分である。彼等は此の土に生を享けてより瀕く勞働の能力を有する頃から其の死に至るまで、營々として單純に他の文化生活の爲に準備行爲のみをなしつゝあるものなりとは如何にしても余には首肯し得られない。即ち經濟生活の文化生活一般に對する地位如何、其の歸趣たる經濟的文化價値の文化價値一般に對する關係奈何は深く尋討を要すべき經濟哲學の問題である。歴史哲學の問題であり文化哲學の問題である。否純理上の問題のみには止らない、苟も人生とは何ぞやの一般的問題に思を潜むる思想家に對しても、此の如く解せられたる經濟生活の意義を究明するはやがて人生一般の意味を悟る所以であつて是所謂物の一端を叩いて其の全豹を窺するものである。敢て問ふ人生を以て不可解の謎なりとなすものは、そが來價の暴驕に苦んで「米騒動」を敢てしたる無產階級の經濟生活について果して能く既に謎ならぬ何物かを捉へ得たりや。

余の信ずるところにして誤まらずんば所謂其の全豹を窺はんとするもの先づ其の一端を叩かざるべからず。叩いて而して之を味讀するに於て其の意義盡くとするのである。唯問題は「如何に」にあるのみ。人生の疑問を提げて其の解決に向はんとするもの、其の希ふところ而して其の期するところ、果して吾等が有する各般の文化生活に對つて又人生一般に對つて、善く其の由來を解せんとするか、其の現實を知らんとするか、抑々又其の歸趣を悟らんとするか。偖問す問者何を問ふや。（七、八、一八）

價値の體系

哲學研究第四十四號、第四十五號
（大正八年十一月及十二月發行）所載同題文訂正

價値の體系

文化價値と「創造者價値」

余が本論に於て解明を試みんとする問題は二つある。而して恐くは是凡ての社會的文化哲學の研讃に從ふものゝ根本問題を形成すべきであらう。即ち一は文化生活の種々の範圍に亙りて其の一が他に對して如何なる關係に立つやを究むるにある。Marx に從つて之を概言すれば凡ての社會生活は其の基調たる經濟生活の反影に過ぎずと解すべきか。Stammler (Wirtschaft und Recht. 2. A. 1906.) に從つて經濟生活は凡ての社會生活の實質にして其の形式をなすものは法律生活なりと解すべきか。又は多くの經濟學者に從つて經濟生活はヨリ高き社會生活たる倫理生活の準備階段に立つものなりと解すべきか。總じて凡ての社會生活の一が他に對して上下、前後、幷列何れの關係に立つべきやを究むるにある。而して余が既に種々の機會に於て舒述を試みた樣に社會生活の凡ての

範圍は夫々に其の係はるべき文化價値(例へば經濟生活に對しては經濟的文化價値、法律生活に對しては法律的文化價値の如く)によつて始めて認識論的に「可能」となり、換言すれば其の限定せられたる範圍内に於ける文化價値に係はらしめられて始めて其の社會生活は吾等に認識せらるゝものと解釋せられ、且其の社會生活究極の歸趣たるべきものを此の特定の文化價値に見出し得べきものとすれば、逆言すれば凡ての社會生活は此の特定の文化價値を實現する一個の過程なりと解釋し得べきものとすれば、上記諸社會生活間の關係を究むるの基礎は言ふ迄もなく諸文化價値其自身の Rangordnung を如何に決定すべきやの根本問題解明の裡にあることを示すものである。即ち例へば經濟的文化價値と法律的文化價値、法律的文化價値と宗教的、藝術的、技術的等の諸文化價値の間に如何なる Rangordnung を認むべきやの根本問題に沒入して初めて其の問題解明の根基が與へらるべきである。

余の問題の第二は此の如くして其の相互の關係を明にせられたる諸文化價値は凡そ價値と稱せられ得べきものゝ全體系の中に在つて如何なる位置を占むべきや即ち文化價値の價値體系中に於ける位置如何と云ふことである。從つて本問は凡そ價値と稱せらるゝものにして文化價値に對立して其の獨立の位置を保ち得べきものありや、其の性質如何、而して其の文化價値に對する關係如何と云ふことに推し移り得べきものである。此くして更に進むで諸文化價値又は其の基礎としての文化價値一般と、之より獨立に之と對立して一個特定の位置を保持し得べき諸價値、即ち吾等の考へ得べき凡ゆる價値の基本として如何なる價値に思ひ到るべきやといふ根本問題に到達すべきである。要するに全價値の體系につきて若干の考察を要求する問題となる。

余が本論に於て此の二問題の解明につきて一個の意見をあり能ふべきものなりと主張するは、取りも直ほさず延いて現時幾多の實際社會問題に對しても亦一個の意見をあり能ふべきものなりと主張せしむる直接の因由である。

古來幾多の思想家乃至哲學者が主張したる所を現今吾等が解する意味に譯するの勞を惜まないならば、恐く如何なる思索家も價値につきて云爲せざるはなく、從つて何等かの意味に於て其の懷抱したる又はせる意見を一個の價値體系に組上ぐることは必ずしも難事ではあるまい。唯併し哲學上に於て價値なる概念が其の重要なる位置を占め來りたるは比較的近時に屬するが爲に[1]吾等が現今有せんと欲する形に於て價値の體系を明に舒述したるものは未だ其の數決して多いとは云へない。のみならず價値を云爲する多くの認識論家の間に於ても、吾等が欲する如く凡ゆる社會生活の範圍に亙りて其の當さに有すべしとする價値を認むるにつきては、幾多の異論もあり得べきは容易に想像し得べき所である。今余は玆處に此等の學說史の全體に亙りて、希臘の初めより現時幾多の社會改造論者に至るまでの凡てにつきて、價値學說の發展史を舒述せんと企つるものではない、而して又是余の能く任とする所ではない。只余の問題を考ふるにつきて余の思想の趨いた代表的學說だけは、之を玆に顧みるは研究者としての余の義務であり且余の問題成立の內面的理由を語るものでもあり得る。

(1) W. Windelband, Lehrbuch der Geschichte der Philosophie. 8. A. 1919. S. 556 ff.

世界の凡ゆる文化が一朝にして消え去るとも、吾等に Platon と Kant とが殘さるゝならば、吾等は之によつて能く永久に人文の記錄を再生せしめ得るであらう。凡ての思索は其の根據を洞察するに於て殆んど Platon に盡き、Kant によつて遺憾なきに庶幾からしめた。今價値に關して吾等が考へんとするものも畢竟其のイデアの世界につきて云爲するものであり、其の Sollen の境に入つて吾等を今圍繞する社會生活の重要につき其の新しき而して至當なる解釋を求めんと欲するに過ぎない。問題は此の如くして常に古い、只新しかるべきは解釋に過ぎない。Platon が Ideen 界の頂上に善を置きたる思想は正しき傳統を通して Kant に至りて當爲(Sollen)となつた。只其の當爲に對する解釋を新にしたる現今の立場より眺められて Kant は其の價値界を論理的、美的、倫理的、宗教的(又は

形而上學的の四に分つものとせらるゝこと一般である。現時に於ても價値の種類を擧ぐるに於て殆んど凡ての學者が此の四を大綱とし僅に之に幾多の小さき結合乃至組合せを試みるを以て常態なりとする。Windelband の哲學體系も全く之によつて組織せられ、(2) Münsterberg の價値哲學一卷も亦所詮此の外には出て居らぬ。(3) Rickert の試みたる價値體系論の一篇又其の趣旨は異なるとも全然此の趣きを脱したるものとは云ひ得ない。(4) 而して恐く是現時斯學の通說と云ひ得べきであらう。若夫其の四價値間の Rangordnung に至つては Platon の善を享けて何れも宗教的形而上學的價値を以て其の頂點に在りとすること も凡ての論者を通じて全く揆を一にして居る。只異論の存するは宗教的價値以外の他の三價値につきて其の間の關係を如何に見るべきかに關するのみである。

(2) W. Windelband, Einleitung in die Philosphie. 1914.

(3) Hugo Münsterberg, Philosophie der Werte. 1908.

" , The eternal values, 1909.

(4) H. Rickert, Vom System der Werte, (Logos, IV. 3, 1913. S. 295 ff.)

此等の學說の中にあつて著しく注意すべき特色を發揮せるは哲學史上恐く唯一の Hegel あるを知り得るのみである。Hegel は Die Philosophie des Geistes (5) に於て Phänomenologie des Geistes (6) 並に Encyclopädie 中の Die Logik (7) 及び Wissenschaft der Logik 中殊に Die subjektive Logik (8) に記述せられたる思想を開展して其の objektiver Geist より absoluter Geist に進展するの主張に到達し此くして價値哲學に對して一の甚だ深き意味を語るべき問題を提出した。近者 Mehlis (9) が其の著書に於て此の兩者の所謂 Geist を「價値」と飜譯して其の解釋に努めたのも蓋し所以あることである。余は今茲に幾多の思想家と共に Hegel の思想の全體に沒入して所謂 „Lebendiges und Totes in Hegels Philsophie“ (10) を檢討することを企てはしない。只古來並に現時の思索家によりて全く閑却せられたる問題の解明が、現今の哲學思想の體系に於て又實際の社會問題に於て、其の解釋に對して唯一の鎖鑰を與

ふるものなることを悟らしむるにつきて Hegel の思想は甚だ意味深き暗示を提供するものなることを玆に明にしたいと思ふ。

(5) Hegel's Werke. 7. II. 1845.
(6) 〃 〃 2. 1832.
(7) 〃 〃 6. 1840.
(8) 〃 〃 5. 1834.
(9) Georg Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie. 1915.
(10) B. Croce の此の表題の下に記述を試みたる研究 (Lebendiges und Toten in Hegels Philosophie. Deutsch von K. Büchler. 1909.) は閑却せられたる獨逸の偉大なる子 Hegel を數ふものは伊太利なりとして自己を英國の Stirling に比するの自負に値するもの也

Hegel 哲學に於ける absoluter Geist の學說は余の玆に事々しく縷述するまでもない。彼は These としての subjektiver Geist に對して Antithese としての objektiver Geist を思はしめ、此の兩者を分別する制限は Geist が自由又は絕對となるに及むて消滅するの意味に於て(11) 其の兩者の Synthese として absoluter Geist を想定するに至つた。此の三者の Geist の各々內部に於て其の理念發展の經路を辿るに當つて彼の全哲學體系の Nerv なる Dialektik を以てすること subjektiver Geist に於ては Die Anthropologie, Die Phänomenologie, Die Psychologie の三階段を以てし、其の各々の內部に於て復た更に其自身多少の無理を敢てしても猶且三個の Momente を以て其の開展の跡を指示せんと欲した。第二段の objektiver Geist に於ても其自身の內に復た Das Recht, Die Moralität, Die Sittlichkeit の Dialektik を追ふて進み、其の三者復た各々前の場合の如くに其自身の內部に、三個の Momente を藏置せしめ、此くして遂に absoluter Geist に至つては Die Kunst, Die Religion, Die Philosophie の三段によつて其理念開展の道を表はし、其の各々の內部に復た三個の Momente を含むこと前階段の凡ての如くとし終に其の究極に於て哲學即哲學史の思想に到達して Hegel 哲學の全體系は閉ぢられて居る。こは余が玆處に縷述するまでもなく凡ての哲學々徒に知られたる Hegel 哲學體系開展の經路である。此の經路の基礎としての Dialektik の性質及び其の價値に關する考察は苟も Hegel 哲

學を研究する如何なるものに對しても必ず觸れざるべからざる、必ず一度は通過せざるべからざるものてあり Dialektik を如何に解するやは實に Hegel 哲學の全體を解釋するに對して最も重き役目を勤むべきものなること亦改めて玆に云ふまてもない。從つて Hegel 研究者にして此の論議に沒入せざるものなく、其の Hegelianer なると Antihegelianer なるとを問はず、善き意味に於てなると惡しき意味に於てなるとを問はず、言苟も之に及ばざるものなきはない。乍併余が今玆に問題としようと思ふ點は此等の諸論者に倣ふて直接 Dialektik 其のものにつきて何物かを求めんと欲するのてはない。本論が特に文化價値の問題を中心としての論議なりとの意味に於て、Dialektik によりて開展せられたる彼の思想の内に少くとも subjektiver Geist 丈は、只其の最後の階段に於て freier Geist を說くことによつて次の階段に入るの基礎をなすものなりとの意味を顧みる以外暫く之を度外に措くこととし、玆には主として objektiver Geist と absoluter Geist との關係につきて其の尋究の步武を進め此くして間接に Dialektik の意味を尋ねて見たいと思ふに過ぎない。

(11) J. E. Erdmann, Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie. III 2. 1853. S. 812 ff.

余は Hegel の objektiver Geist と absoluter Geist とに關する思想を顧みるに於て、未だ嘗て私に余が文化哲學の二つの根本問題なりとするものを明瞭に思ひ浮べざることなきを得ない。即ち本論に於て解明を試みんとする問題てあるが、Hegel が哲學即哲學史を以て理念開展の頂點を形成するものなりとする所以に對しては Hegel の學說を稱するに Panlogismus を以てするの最も至當なりとせらるゝ點よりしても當さに首肯せらるべきてあるが、抑々此の如く absoluter Geist を以て objektiver Geist の發展したるものとし、其の全體を包含し其の統一を思はしむとするの思想並に特に其の中の或る一の Geist 又は Wert に於て全體系の頂點を形成せしむる如き Hierarchie を想定することを吾等は當さに如何に考ふべきてあるか。之が先づ第一の問題てある。余は玆に Dialektik に於て aufzuhebende

Momenteとせらるゝものは反對の概念なることを要し(例へば善惡、美醜眞僞の如き)單純の抽象ならざる二個の具象的現實(例へば理念 Idee に對して其の Momente として Hegel が考へたる Natur と Geist の如きもの)なることを得ずとするの論點を明にすることCroceの如くになして、個々の範圍に亙りて其の論理的不可能を論證せんと欲し又は出來得れば其の駁論を考へんと欲するものではない。問題は Hegel ならずともKantでもよし又 Platon でもいゝ。Kant, Fichte の如く凡ての價値を倫理化せんとするもの、Schelling の如く之を美化せんとするもの、Comte, Hegel の如く之を論理化せんとするもの、Schleiermacher の如く宗教化せんとするものに對して之を如何に解釋すべきかといふことである。Hegel の理性化を以て問題なりと思ふ者は开が單純に理性化なるの故を以てのみか、又は抑々其の諸價値中の何れか一を以て他の凡てに對して「優越」を示すべきものとする如き一「定の Wertordnung を與ふること其自身が問題なりとは云ひ得ぬか。Platon, Kant の倫理化に對しても亦同樣のことを考へ得ぬか。此の如き Wertordnung を與ふることによりて先づ第一に疑問となるべきは此の如き Hierarchie を形成する根據は抑々何れにありやと云ふことである。第二には此の如くして能く下位に置かれたる價値の絶對性を毀損することなきを得るやと云ふことである。余は此の點に關して深き疑問を有するものである。

Hegel の objektiver Geist に表はれたる者は法律道德、倫理國家、歷史等に關するものであるが、之を超えて藝術、宗教、哲學の境地を認めたことに對しては更に考ふべき深き意味の問題が其處に横はることを非認し得ない。一方は法律、經濟、政治、技術は勿論道德に至るまで其の完成を未來に望まざるべからざる如く、謂はゞ時の流れ、進步發展の歷史の裡に其の重要と意味とを委せざるべからざるに、他方藝術は云ふ迄もなく哲學に至るまで各々其自身に完了自足したる體系として、其の確立を歷史的發展の時の流れの外に超然として要求し得るものとして、兩者の間に峻別する所ありたるは、確かに、此等の凡てを總括して廣き意味に於て文化の所產と解し得るとしても、又自ら其の間に性質上截然區別する所あ

らざるべからざる所以を示したるものとして確かに卓見と稱すべきである。希臘の彫刻と哲學、伊太利文藝復興期の繪畫、シェクスピヤの戯曲、中世の神秘主義、獨逸古典期の文藝、音樂、其の哲學の如き、之を歴史の濤に、發展の流れに其の行末を委せたる蒸氣、電氣の技術、政治經濟上の諸制度と比するときは、明かに其の間に何等かの差別を認めざるを以て寧ろ不當とさへ思はしむるものがある。

若夫價値の表現より見ても既に美的文化は宗教的幷に哲學的文化と幷行提携し得べしとするも、道德的、倫理的、法律的文化とは背反對峙の關係を持續し來りたることは古來歴史上其の類例に乏しくない、のみならず、現今我が日本に於ても常にあまりに多く見聞し得る事象である。更に夫の藝術的、宗教的哲學的天才につきて見るに、進歩發展の極致が永久の未來に横はり、其の努力の目標として只其の方向が此等の價値に與へらるゝに過ぎずとするならば、彼等は其の藝術的所產に於て、其の宗教的憧憬に於て、其の哲學的體系に於て永久に唯何等かの貢献をなすのみにして、一個の自足完了したる境域に突入し得べしとするの信念に酬ひらるゝことなくして終らざるべからずとするは、恐くは彼等の生命を奪ふにも等しいであらう。國家、經濟、技術、法律の文化は部分的に改變を許容しよう、其を以て進歩とも名づけ得よう。藝術宗教、哲學の業に至つては部分的の改變は即ち全部の滅却を意味するものでなければならぬ。誰かプラトーンのイデア論にマルクスの唯物史觀論を私かに混じ得よう。誰れかミケランゼロの羅馬宮殿の壁畫に雪舟の筆を加へ得よう。ベートーヴェンのシンフォニーに清元を挿み得ようぞ。彼等の業は時の流れ、人のどよめきを超えて其自ら圓滿完備の相を具するものとして其自身の深き意味を内面より迸り出でゝ語り得べしとするの信念に活くるものに非ざるはない。Hegelが此の三者に特別の地位を與へたるは彼が深き洞察の賜たるは疑ふべくもない。

乍併此の如く兩者を區別することが首肯せられざるべからずとし例へば法律殊に道德に對しても唯々objektiver Geistの辨證論的開展の一要素たる位置を與へ得るに過ぎずとすれば、哲學、藝術等に比して全く性質の異なれるものと見

ざるべからざるに至るは當然であるが、併し果して其の間に些の考ふべき餘地なしと云ふべきであらうか。吾等は問はう。道德上の天才を思ひ得ざるか。更に法律上の天才を思ひ得ざるか。假令一人の天才に思ひ到り得ぬとしても此の如き天才を抱擁したる一時代を思ひ得ざるか。特殊科學として見たるユークリッド幾何學の如き幾千年の思想を支配したるものもあり、ローマ私法の如く儼として二十世紀の今日に至るまで社會生活の基調をなすものもあるではないか。反對に哲學に於ては進歩を許さず、部分的改變を容れずとするも吾等が有する數千年の哲學思想推移の跡は、只其の昔既に想ひ定められたる主義、組織の新しき領域に對する單純なる適用に過ぎずとするまで後代幾多の思索家は殆んど比較に値せざる程無價値の考察に耽りつゝありたりと見るべきか。

此の如くして一方にはHegelに從ふて、同じく文化所產とは云ひながら多くの價値の間に截然たる區別を要すべき何物かの存在するを否み能はぬと同時に、他方然らばHegelの解する所に從つて其の主張する如き分別を認容して徹底的に其の解釋を究極まで推し進めんとすることは、いまだ遽に卒然として其の凡てに亙りて吾等の承認を贏ち得ざるものあることも恐くは否み得まいと思ふ。此くして玆にも解釋を要求すべき一大難問が横はつて居るのではないか。是余が第二問として玆に提出して見たいと思ふ點である。

二

思惟せられたる矛盾は既に打勝れたる矛盾なりと云ふと同じく、又藝術的鑑賞を以て滿足し得ざる精神は既に藝術的精神に非ずして之を外にして他の範圍に於て將さに始まらんとする宗教的乃至哲學的精神なりとすると同じく、一の社會生活の範圍に於て其自身完了したる意味を見出し得ざるときは其の時は既に他の範圍の社會生活の解釋が要求せらるゝ時である。此の如くして社會生活の凡ゆる範圍に亙りての認識が求められ此の根據の上に凡ゆる範圍の認識が又可能ともなり得るのである。而して此の如き多くの範圍に亙りての認識は相互に一以て他を其の完了したる意味の內に抱擁し得ざるに於て、又此

の故に互に相亘る所あるによつて相關的なりと稱すべきである。前の例を以て曰へば哲學的普遍を以て滿足することを得ず感官的直觀と人生の端的なる接觸とを思ふものは最早哲學的精神に非ずして特殊態の鑑賞に沒入せんことを希求する藝術的精神である。其の間一を以て準備階段たるべしとする上下の關係は之を見得べくもない。若し此の意義に於ても猶一以て他の前階段にある基礎たりと云ふならば、反對に他以て一の前階段にある基礎たりとも云はねばならぬ。凡そ吾等が社會生活の樣式として數へ得る學問、藝術、道德、宗教、儀禮國家、政治、法律、經濟、技術等の各般の範圍に亙りて之を觀るに、其の認識の起る因由幷に其の根據は上述べた如く一の範圍に於て其自身完了したる自足の意味を悟り得ざる所に其の範圍の限界が畫せられ、其處に他の範圍の認識が可能となるべき根據が据えらるゝのである。其處に其自らの認識目的を具有する各種の文化價値が一以て他に對峙、併し幷列し得る根據がある。一以て他に據る所あるは偶々其の各々が獨立に成立し得る根據である。玆に共通の基調を見得ると同樣に差別の根據がある。乍併吾等の忘れてはならぬことは、此の如き差別の根據があり認識の可能がありとしても、一以て他に對して其の限界が据えらるゝ爲には、閑却せられたる全體に亙りての基調たる分母の存在するといふことである。一の範圍が其自身に於て獨立の意味を有し、他の範圍は此の中に包擁せられず、後者は更に其自身完了したる意味を其の分たれたる範圍の內に立し得べしとするは皆共に此の基調の上に於てゞある。もし各特殊の範圍に於ける生活の認識論的根據をなし、兼ねて其の目標となり、其の歸趣たり得るものを以て各種の範圍に於ける文化價値なりとすれば、此等の凡てを依つて以てあらしむべき全體に亙りての閑却せられたる基調を把握せしむるものは所謂文化價値一般と稱すべきものである。所謂文化價値一般を悟ると云ふは此の基調を心中に把持することである。此の基調の上にあつて各特殊範圍に亙りて認識論的に可能とならしめられたる社會生活の各樣式は一以て他の意味を自足的ならしめず之を破毀せんとする點に於て、其々成立の根據と限界と

を持つものである。

余の此の意見にして誤まりなしとすれば、社會生活樣式の全體に亙りて一以て他の前階段にあるものとし之に上下の關係を見んとするか、又は唯其の一を抽出して凡ての他のものに對して頂點を形成せしむとすること、或は宗教的價値を以てし或は倫理的價値を以てせんとすること、從來殆んど凡ゆる哲學者の言ふ所の如くならしめんとするには、之に對して特別の論據が示されねばならぬ。上來の論述に從へば或る特定の範圍に於ける生活樣式從つて其の價値を以て所謂全體の基調たらしめ或は善、或は自由、或は人格の如く一に主として倫理生活上の適用を思はしむべき概念を以て其の全體を覆はんとするは、云ふまでもなく此の基調に內容を與へんとするの意義に於て、却つて論者が常に力を極めて排擊せんとする心理主義に陷るものか、又は抑々諸價値の間に Hierarchie の存在を意識的にか又は無意識的にか認めんと欲するものに非ざるはない。之に對して充分に其の論據が示されねばならぬ。

hierarchy 階級 位階

余は今茲に各種の學說に亙りて一々其の論據を內在的に檢覈しようとは思はない。Platon の昔より Kant を經て現今の認識論家に至るまで、總じて先づ第一樣式を以て第二樣式に沒入せしめ、第二樣式を以て第三樣式に沒入せしめ、此くして一個の Hierarchie を形造り而して最後に唯其の中の一樣式をとつて其の頂點に置くに至つたことは、之を根本に立ち入つて考へて見ると、皆是畢竟ずるに其の一若くは二若くは三以上の樣式乃至價値を Hegel の用語例に從つて aufzuhebende Momente として、其の上に其の總てを調和整正すべき一個の統一を思ふによつて然らしめたものである。而して是正に或は(一)其の一 Moment の內に其の意味を自足完了せしめ得ざる或者あるに至り、之を他の Moment に移して完了せしめ得ることを思ふが爲に茲に純然たる Abstufung を想定するか(此の場合には後者の意味完了の爲に再び前者に復歸し得べき關係はあり得ない——此の事は特に注意を要する。)或は(二) These と全く相反對する Antithese とが相互に背反的排他的なるが爲に之を打つて一丸とし、之を統一に導き、漸次 Hegel に見た

る如く此の關係を繰返して Hierarchie を形成するものでなければならぬ。後者の場合に於て Synthese なるものは These にもあらず Antithese にもあらず、只此等の二を其の内に包容して其の内に含む反對を調和したる統一なるが故に、之を究極に導くに於て其の如何なる形式を以て頂點を形成せしむるとしても、其の樣式又は價値が全體系中の一員なる以上、其の Dialektik は到底常に其の過程の中道に止まるものと云はねばならぬ。而かも猶其の之をしも完了したる組織なりと考へしむる爲には、畢竟前の場合と全く同樣に一樣式一價値に於て頂點を形成せしむべき Abstufung の考へに歸一し得べきものとせねばなるまい。其の開展階段の中途に於ける Momente が互に背反對峙の關係にあることを要するものとして Synthese は此の反對を調和し統一するものなりとするの點より二の Momente と Synthese との關係を如何に見るべきやは後に論ずることゝして今玆には之を度外に措くとすれば、所謂 Dialektik と Abstufung の考へとは其の體系中に列れる一員を其の窮極の頂點に置くといふ意味に於ては、飽くまで其の過程の中途に止まり謂はゞ心理主義に從ふものであつて、此の點に顧みて兩者共に同一の立場より觀察せられ得べきことを示すものである。此の兩者の考察に於て途中の階段開展に於ける Moment の數が或は一若くは二なるとか、又は其の性質に於て差違ありとするは此の最後究極の觀點よりしては閑却し得べきものと云ふことが出來る。然らば問題は抑々此の如き Abstufung の考へが正當の根據を發見し得べきかと云ふことである。

凡そ Abstufung の考への適用せらるゝ場合は或る一範圍の社會生活並に價値が其自身の自足完了したる意味を語り得ぬ場合に其の限界が畫され、他の範圍に於ける社會生活並に價値を思はしむるを以て足れりとすることは出來ぬ。若し此の場合のみに止まらば上述べた如く其の各範圍の關係を相關的、並列的に見得べき可能もあり得べきものであるからである。Abstufung が正當に根據を占め得る爲には其故に、例へば衣食足りて禮節を知ると主張するものゝ如く一が他の成立條件として其の全部の意味を内在的に不可缺のものとする關係

にあらねばならぬ。即ち社會生活の樣式乃至之に照應する價値が他の成立の條件として其の全部的意味に於て不可缺のものなりと解すること、恰もBなくしてAは考へ得るともAなくしてはBを考へ得べからざる如きものでなければならぬ。此の場合BはAよりも高き階段に立ち、一個のAbstufungが成立し得と見るべきである。此の點を如何に見るべき。

余は根本に於て若し此の如き意味に於てAbstufungが成立するものなりとせらるゝならば、社會生活の各樣式に於て從つて諸文化價値の各々に於て、其のヨリ下層に立つものは上層に立つものゝ中に全然沒入せらるゝに至り、謂はゞ一個の手段として見らるゝことなくして能く其自身獨立の意味を如何にして保ち得るやを解するに苦しむ。例へば經濟行爲は常に其の全部的意味に於て倫理行爲の準備行爲又はhöchstens其の一部のみなりとするならば、經濟行爲は何故に倫理行爲と分たれて而かも相關聯して其の獨立の意味を保ち得るやを解するに苦しむ。加之ヨリ低き階段にある生活乃至價値が次の階段にある生活乃至價値の全部的意味に於ける不可缺條件なりとするならば、高次の生活乃至價値は低次の其に比して亦全然獨立せる其自身固有の意義を有すること能はざるに至るべきである。例へば衣食足りて初めて知らるべき禮節が禮節の眞の意義を表はすものなりとすれば、衣食足ることを離れて定め得べき禮節の獨立固有の意義は何處に在りやと云はねばならなくなる。凡ての社會生活を以て經濟生活の反影に過ぎずとするものは經濟生活を離れて政治生活、法律生活、學問生活其の他各般の物質的並に精神的生活の其自身固有の獨立なる意義を探り得べからずと見らるゝ所に其の深き缺陷が横はる。

此の如くして全體系中の一員を以て究極の頂點を占めしむるAbstufungの考へは嚴正に正、反、合を以て進むDialektikの考へに從ふものと然らざるものとを問はず、共に社會生活並に文化生活の各々につきて之を認むること難しと言はねばならぬ。然らばDialektikの考へへの基に遡つて二の背反對峙せるMomenteと其の兩者の反對の調和統一を示すものとしてのSyntheseとの關係を社會生活

從つて文化價値に於て認むることを得ざるやと云ふ問題が殘る。余は此の二Momente とSynthese との關係が可能なる爲には二の要素は全く相對峙背反するものなるべくして此の二の要素の内に既に此等とSynthese との間に見られ得る可き樣のAbstufung の關係があつてはならぬと考へる。若し之に反して假りにDialektik の二Momente 間に既にAbstufung の關係を見るも差閊なしと云ふならば乎は自ら別論に屬するが(1)併し今本論に於て關説する範圍に於ては若し二Momente 間に既にAbstufung の關係がありとすれば之より更にSynthese に對しても遞次的にAbstufung を考へ得べきが故に余が前段述べた意義に於て此の如きは社會生活及び文化價値の凡てに至りてAbstufung の關係を認めしめんとするものであつて上述べた如く余は之を否認せざるを得ない。之に反してDialektik 本來の意義に於て二のMomente は互に相背反するの關係にあり此反對を調和統一するものとして二Momente とSynthese との間の關係を思ふときは前のAbstufung の關係とは自ら別個の意味が存在することは明である例へばSein, Nicht-sein とWerden との關係の如きである。此の如き關係が社會生活乃至文化價値の間に認めらるべきか。

(1) Hegel の Dialektik に於て二Momente 間に既にAbstufung の關係と見るべきもの多々あることは明かな事實である。

Hegel の objekttiver Geist 中の三要素として掲げたるものゝ中Recht とMoralität との關係は一應は此の意義に於てのThese とAntithese との關係とも見得ざるにもあらざる樣である。此くして社會的Legalität と個人的Moralität との反對は否定せられ且保持せられてSynthese となりSittlichkeit となつたとも見得る。併しRecht とMoralität との關係は恰も藝術と哲學との關係に於て藝術は哲學を排除せず哲學は又其の藝術的方面とも見らるべき言語等の手段なくして成立し得ずとする如き差別概念的のAbstufung が其の間に存する關係は復た全くdas Recht とdie Moralität との間にも見得る所なりとすることCroce (2) の如きもある。惟ふに總じて社會生活の如何なる範圍文化價値の如何なる種類を採り來るも之を

These 及び Antithese として背反對峙の關係に措定せんとすることは恐く難事であらう。經濟と道德との背反は通俗の語義に於て These と Antithese との關係を思はしむるに近き者ありとしても、其の本來の意義に於て藝術と道德との差を思はしむるものと何れであらう。學問と法律との時々の背馳と何の撰ぶ所があらう。Hegel の Dialektik は These と Antithese とが既に Abstufung の關係にあるものとして考へられたるが故に可能となりたれども、若し此の關係が嚴正に背反對峙のものたるを要すとしたならば、如何ほどまで其の Dialektik が可能なりしなるべきやは恐く疑問であらう。余は These と Antithese とが背反對峙の關係にあるにより初めて Dialektik は可能となるものと信ずるけれども、此の如き背反對峙の關係を二の社會生活及び二の文化價値の間に認むることは恐く不可能であると思ふ。

(2) B. Croce, a a O. S. 73.

此の如くして前きに各價値間に遞次的 Abstufung を認むることを否認せらるべしとし、今復た其の中の或る特定の種類のものに對して Dialektik 本來の意義を適用して諸價値間の背反對峙を想定し、之に對して辯證論的の開展を想ふことも肯定せられざるべしとするならば、殘る所の可能は唯だ一つあるのみである。即ち諸價値間には此の如き關係の何物をも認むることなく凡ゆる考へ得べき而して認識論上可能なるべき社會生活の各範圍は、以上の說に反對して、互に唯だ並列の關係にあるものとし、而して更に其の凡てを覆ふて上階段に位すべき價値を解して或は倫理的生活乃至價値、多くの場合に於ては乍併宗教的生活乃至價値とするといふこと以外には、從來通行の學說に於ては最早や社會生活乃至文化價値の Wertordnung は可能とは云ひ得ない。然らば此の如く考ふることは如何あるべきか。

此の點に於て余は倫理的乃至宗教的生活又は價値の如き兎も角社會生活の一樣式、文化價値の一形式として考へられ得べき意義に於ては、假令諸生活樣式乃至諸文化價値間の關係は幷列の關係にあるものなりと見るとしても、之を以

て其の總てを覆ふ所の上層にあるものと解するは、明かにカントが排したる意義に於て心理主義の誤まりに陷つたものであると思ふ。故にもし之に反して此等の頂點に置くべき生活樣式乃至價値は、其の名稱は假令倫理的、宗教的價値の如く全體系中の一員を以てしても、此の場合に於ての此の生活樣式乃至價値の意味其のものは他の生活樣式又は價値と共に全體系中に幷列せらるべきものに非ずとするならば、幷は取りも直さず全體系中の一員として他のものと幷列の關係に於て考へ得べき何ものを以てしてもならぬと云ふことを最も明に示して居るものである。人生生活の總てを包括せしめ或意味に於て其の目標、其の理想、其の歸趣を示すものとしては知的生活を排すべしとの意味に於て、同じく人生の一面たる倫理生活を基調とする善の概念を以て、同じく人生の一面たる宗教生活に根張ばれる聖の概念を以てせんとしても、幷は此等人生の一部又は一面的解釋を許し得べき意味を其自身に有するものに依つては、到底人生全般の歸趣目的は之を表はし得ないといふことを看取し得ぬものである。而かも生活樣式乃至價値體系中の一を以てするに非ずんば抑〻Wertordnungは不可能なるを奈何せんやと云ふDilemmaに立つものである。恰も思惟を排除する宗教家、哲學者が之を言ひ表はし而して甚だ稀ならず萬言を費すに思惟の形式を籍らざるべからざるに等しい。彼等は思惟を排却せざるべからずと思惟しつゝある。其自身の價値を判定せんとするの背理なるは共に其の撰を一にして居る。積極消極の區別はありながら共に自己の眼を以て自己の眼を看んと欲するものに等しい。余は何故に此の矛盾を見得ぬかを怪しむものである。

三

以上余は消極的に文化生活の各範圍に亙り從つて文化價値の各種につきて、其の間如何なる意義に於てかRangordnungを認めて之を一のHierarchieとしてのWertordnungに形成せしめんとすることは、到底其の論據を缺けるものなることを指示せんと欲した。余は今積極的に文化生活從つて文化價値の各々につきて其の關係を如何に見るべきやを明にして見たいと思ふ。

文化生活從つて文化價値の凡ゆる範圍に亘りて其の間如何なる意義に於てもWertordnungを見るべからずとするの思想は、勢ひ此等の凡てを同一平面に並行並列するものと見ざるべからざるは極めて明てである。而して實に余は此等のものゝ間の相互の關係を上下の階層をなすものに非ずして並列の關係にあるものなりと見たいと思ふ。是甚だしく通説に反するものである。乍併余は一方何故に上下の階層をなすものとして見ざるべからざるかの根據を解する能はざると同時に、他方上下の階層をなすと見らるゝ一定の秩序は又看點の如何によつては全く正反對に、通説の上層となすものは下層とも見られ、其の下層と見らるゝものは却つて上層にあるものと見られ得るは、即ち其の兩者の間に區別せらるべき一定の限界と其の限界の根據との存在することは左りながら、單に兩者の間に相關的の關係が存するに止まることを示すに過ぎずと見るものである。換言すれば余は上來説述したる如く一方價値の順序を定むるの根據を認むる能はざると同時に他方通説に於て上下の階層をなすものと見るは實は並行的相關的のものに外ならざることを看誤まりたりとなすものである。

如何なる意義に於てもWertordnungを見んとするものに首肯し得べき根據を缺くことは既に吾等は之を檢したが、余は玆に進むで例示を以て上下の階層をなすと見らるゝものも實は並行相關の關係に在るものなることを明かにして見ようと思ふ。Hierarchieの頂點にありとせらるゝ文化生活乃至文化價値が宗教的、倫理的、美的、論理的なりとせらるゝことは哲學史上凡て其々偉大なる代表者を有するものである。就中宗教的及び倫理的價値に其のWertordnungの項點たる地位を與ふることが最も普通の見解である。

宗教的價値に他の三價値が倚屬すると論ずることは吾等と雖も容易に同情し得る所である。乍併他の三價値の何れと雖も此の宗教的價値と同じく、自らを除きたる其の餘の三價値の各々を其の成立の倚屬的integrierendeの條件として有するものなりと論ずることは決して難事ではない。例へば倫理生活の畏敬すべき代表者に於て吾等は自由を思ひ、人格を尊び、道に遵ひ、仁を念とするに

際し、其の間に能く宗教的憬憧敬虔の念なきを思ひ得るか。其の一個の偉大なる人格の完成に對して吾等は藝術的鑑賞の眼を向け得ざるか。其の倫理生活の遂行に於て明邑なる理智の透徹を思はずして止み得るか。是即ち根柢に於て倫理價値に對する宗教的、美的、論理的價値の倚屬關係を示すものに非ざるはない。美的生活の驚異すべき完成者に於ても亦同樣である。其の美的所產に對するや彼は恐く天賦永劫の相を此の中に認むるに宗教的信仰の念に打たれずしては止まざるべきであらう。自己の製作に膝まづいて懼伏したる夫の逸話は此の間の消息を傳ふるものにあらずとはしまい。其の深く內に懷抱する或ものを表現するに於て自由を思ひ人格を體化する倫理生活の面影を示さざるべきか。一線を畫すの筆、一擊を當つるの鑿、其の動くや內面的規則に從ふを思はしむるものあるに猶且能く其處に論理の開展を閑却するを得べきであらうか。論理生活の感嘆に値すべき鴻儒の思索に於ても亦然り。彼は論理の峻嚴を前にして之を仰ぐに宗教的畏敬の想を以てせざるべきか。其の深き廣き思想體系の完成は吾等をして美的作品に對するの感を抱かしめざるべきか。仁者の心を以て心とするに非ずんば焉んぞ能く一學徒の口より「上にありては星空、內にあつては道德律」と感嘆の聲を放つを聞き得べきぞ。

否、此等は價値の總てが其の一價値の完成に對して相互に倚屬的の關係にあることを最も明瞭に示すものである。即彼等は相互並列的に乍併密接に相關的なるを示すものに非ざるはない。何れの一をとるも尙ほ是同時に他の凡てを語るものである。而して是ぞ言ふまでもなく自己と共に他の凡てをして、依つて以てあらしむる基調の儼として存するを語るものである。

此の理は通常倫理的生活の中に包含せしめられて考へらるゝ經濟、技術、政治、法律、道義、習慣、教育、軍事等の各社會生活樣式及び其の論理的基礎たる各文化價値につきても同樣に主張し得る所である。例へば經濟生活を以て狹義の倫理生活即ち道德生活の準備階段なりと說くものありとすれば、余は其の反對に道德生活を以て經濟生活完成に必要なる準備階段にあるものなりと大なる困難

なしに立證し得るであらう。人若し「凡ての重要なる歴史上の出來事に對する究極の原因及決定的動力は之を社會經濟發展の中に見るを得べし」として凡ての法律的、政治的乃至精神的生活を以て經濟生活の反射なりと說くものあらば、余は亦容易に或る社會の經濟生活はその法律、政治的乃至精神的生活の反影に過ぎざることを明にし得るであらう。

余は此の如き意味に於て凡ゆる考へ得べき社會的文化生活及び其の論理的基礎たる文化價値の上に何等の意義に於てもWertordnungを發見することを得ない。論者が立し得べしと信ずる上下の階段は、亦全く同じ生活樣式及び價値につきて、其の反對の階段を考ふることも同一理由により立證し得ることを示すは、即ち此等の諸樣式及び諸價値の間に只相關倚屬の乍併相互に獨立せる關係の存在することを明瞭に示すのみである。

此の如くして余は凡ゆる社會生活の樣式に亙りて而して凡ゆる考へ得べき文化價値を通じて、其の間に一以て他の上段又は下段にあるべき樣のAbstufung

は如何なる意味に於ても考へ得ない。其の一が其自身完了したる意味を明にし得と考へらるゝときは、既に其の他の範圍に於て明にせられ得られざるべき意味が其處に在り、唯其の自己の範圍內に於てのみ明にせられ得べき意味が可能なりといふことを示すものである。此の意義に於ては個々の社會生活の樣式及び價値は同一基調の上に相互に關聯倚屬しながら猶且其自身獨立の意味と地位とを有すべきことを示すものである。若し其の認識成果の體系を其の係はるべき範圍內に於て成立すべき學問なりと解すれば、其の學問の認識目的は當さに玆處に其の深き根基を求むべきである。此の意義に於て吾人の數へ得る學問、言語、文藝、造形美術、道德、宗敎、儀禮、慣習、愛、國家、政治、法律、軍事、經濟、技術、敎育等各般に亙りての社會的文化生活及び其の論理的基礎たり、兼ねて其の目標たり、其の歸趣たる各般の文化價値は、皆其々に其の特有の意義を保持して同一基礎の上に相互に不即不離の關係に於て並列すべきものである。凡ての勞働は神聖なりとは此等の各々に於て其の價値實現に參與するに際して、其の根本

に於て價値其のものに上下の階級なきの致すを以ての故のみである。凡て人は平等なりとは其の各々の人生を價値生活と觀ずるに於いて、其の價値實現に參與することの意義が平等なりと云ふのみである。實際の社會生活に於いて一商店の店員が小切手に署名するの經濟行爲を以て或る後に來るべき倫理行爲の準備階段なりとは考へ得べくもない。又彼の行爲が其の儘に即ち先天的に、一國帝王が其の詔書に署名すると Wertordnung を異にすべしとは思ひ得ない。共に其々の行爲が其々の範圍に於て價値實現の過程にあるものなりと見らるゝに於ては、余は其の間に Rangordnung を附し一を以て他の階段の下に在り又は其の上に在りとは解し得ない。此の故に余は諸文化價値の上に於て何等の意義に於ても Rangordnung を發見し得ない。余の所謂「文化主義」は一個特定の文化生活を偏重せんとするに對して反抗の聲を擧ぐるに於て其の消極的意義を語らんと欲するものである。(1)

(1) 前出「文化主義の論理」參照

Hegel が absoluter Geist として objektiver Geist と分ちたる藝術、宗教、哲學に就ても開が又其々に文化價値なりと解釋せられ得る意味に於ては余は法律、道德、國家、政治の諸文化價値と離れて又は其の上に特異の地位を與ふべき所以を見得ない。文化價値と解釋せらるゝ範圍に於ては凡ゆる價値は凡て相互に幷列の關係にありと見るべきである。文化價値の全部に對立して他の種の價値を想ひ得べきことは余が後段本論に解明せんと欲する第二の問題に屬する。茲には唯凡ゆる文化價値と解せられ得る範圍の價値の間に於ては假令 absoluter Geist と稱せらるゝ藝術、宗教、哲學の價値に對しても objektiver Geist と稱せらるゝ國家、法律、政治、道德、人倫等の文化價値と相對して其の間何等の意義に於ても Wertordnung を認むること能はざるを明にしたいと思ふ。

唯茲に一個の考ふべき問題としては、若し文化價値にして其の全範圍に互りて相互に關聯倚屬且獨立なる地位を認めらるべしとしても、其各自の限界を畫し依つて以て其の各々の可能を基礎附けし得べきものは或る一個の遍通なる

基調の上に於ててなければならず、相互に分別せらるゝ所以は取りも直さず既に其の分別せらるゝによつて相結ばるべき基礎ある事を示すと云ふ事である。此の所謂基礎、基調なるものは、之を認識論的に見れば其の諸文化價値從つて之を通じて諸文化生活を論理的に可能ならしむる最も深き根基であり、之を形而上學的に見れば諸文化生活の係はるべき凡ゆる文化價値の意義を明かならしむる目標であり且歸趣である。文化價値一般とは即ち此の謂である。并列關係にある諸文化價値の全部の此の文化價値一般に對する關係は之を內容の側より見れば余が既に他の機會に於て論じたる如く[2]恰もSinとSollenとの關係に於て後者が前者の極限概念として見られ得ると同樣の關係に立つものと思はれる。之を形式の上より見れば總括的文化價値一般の諸文化價値に對するは恰もGattungsbegriffの其のExemplarに對する如く、Hegelの思想に從へばDas konkrete Universaleと考へ得らるゝであらう。各種の分たれたる文化價値は即ち其の特殊の形式に於ける文化價値一般なりと解すべきである。吾等の有する各般の文化生活を以て、各々其の係はるべき範圍內に於ける文化價値實現の過程なりと解し得べしとすれば、其の目標、其の歸趣は各般の其々の範圍に於ける文化價値を通じての文化價値一般なりと見ざるべからざるの理は玆にある。

余の所謂「文化主義」は各般の文化生活を價値實現の過程なりと見るに於て、各種の文化價値を其の特殊形式に於て表はしたる文化價値一般に係はらしめらるるに於て其自身の最後の意味を探り得べしとし、此の如くして凡ゆる文化生活の範圍に亘りて一樣に且一齊に、文化價値一般の內容的實現を希圖する謂はゞ形而上學的努力に於て其の積極的意味を語り得べしとするのである。此の如き圓滿具足なる社會生活の體樣を稱して通說に見る如く宗教的生活となし又は倫理的生活となすことを得ざるは明であらう。一社會生活の樣式を以て全般を覆ふ能はざるは玆に至つて最も明白である。强ゐて名づくべくんば文化主義を體驗實現したる社會生活とも稱すべきである。人生の意義は玆に盡き、歷史の意味は玆に終る。此の意義に於てドック勞働者の勞働は先天的に帝國

宰相の勞務と上下の階級を附すべき價値實現の上に於ける意味の差別はあり得ない。余をして一の極言を許さしめば德川末期に於ける狹斜の文明は soleil の宮廷文化に比して未だ先天的に其の優劣を判ずべくもない。凡ゆる文明批評の根基は其の係はるべき諸文化價値而して之を通じて文化價値一般に對する關係、交渉、意味如何に在る。

(2) 後出極限概念としての文化價値參照

此の如くして余は文化價値一般と各種文化價値との間には或る意味に於て一種の Rangordnung を認めざるを得ない。乍併此の意味に於て假令 Wertordnung を云爲し得べしとするも、他と幷列の關係にある或る一種の文化價値を以て其の Hierarchie の頂點を形成せしむとする如き心理主義の誤まりには陷つて居らぬ。又各種の諸文化價値の間に一貫したる Abstufung を見、其の頂點に文化價値一般を認めんとする如き普通の階段說に見る如き誤まりにも陷つては居らぬ。余は文化價値一般と諸文化價値との間の關係は既に述べた如く、寧ろ諸文化價値と其の各々の係はるべき範圍內に於ける文化生活との關係として見る Sein と Sollen との關係を玆に繰返すものゝ如く見て、文化價値一般を以て諸文化價値の極限概念なりと解して先驗的心理學的考察に從ふか、又は諸文化價値相互の關係は共に倚屬關聯しながら猶且獨立幷行的なる不即不離の裡にありとし、而して此等諸文化價値の文化價値一般に對するは恰も其の Exemplare の Gattungsbegriff に向ふものに類すとして先驗的論理的考察に從はんと欲するものである。

以上余は本論に於て解明を試みんと欲したる第一問に答へ得たと信ずる。

四

余は今進むで各種の文化價値幷に之が Das konkrete Universale たる文化價値一般に對立して考へ得べき他の種の價値のあり得べきやを研覈して、之と文化價値との關係を尋ねて其の相互の價値體系中に於ける位置を決定して見たいと思ふ。

Hegel が absoluter Geist として擧げたる藝術、宗教、哲學等の價値が objektiver Geist

たる法律、國家、政治、道德、人倫、歷史、等の價値に對して其の區別せらるゝ所以の動機を繹ぬるときは、確かに其の問閑却すべからざる深き思索の跡を辿ることを得るであらう。(1)　歷史上の諸事蹟は唯永久に去來の濤の如く、翻翻たる大空の雲の如きものでなく、一民族は一民族に、一代は一代に吾等が何物かに向つての精進である。其處に進步を語り得、其處にイデーを望み得る。吾等が政治、經濟、技術、學問に於て「吾等に殘されたるものは吾等が有とするに努め、之を後代に傳へて其の有とするに努めしむる。其處に歷史の生命があり、其處に人生の悠久がある。進步は歷史の Nerv である。今吾等が有する文化價値の意義は Hegel が指示したる objektiver Geist の凡てに亙りて一として皆其の將來――其の實現と完成とを發展の流に托せざるものはない。

(1) G. Mehlis, a.a.O. S. 301 ff. 472 ff. 529 ff.

歷史は不斷に亙りて永劫の精進であり而して努力である。所謂文化は其の努力の記錄に過ぎぬ。吾等の前途には星の光、燦として輝き吾等は永久に其の榮光に憧れて進む。イデー Sollen の目標は吾等の行く手遙かに儼として立ち、吾等は常に現實を思ひ Sein に顧みて其の無爲に茫乎たるのみである。歷史は現實と理想、文化は Sein と Sollen との距離を征服せんとする吾等の哀れむべき若くは慰むべき日記に過ぎぬ。而して決定的に其の距離に打勝たんと欲するは言ふまでもなく人類最終の目的である。

歷史は又一人の業でない。人は人と相扶けて或はアリアン文化の種を播き、ギリシャの花を咲かしめ、文藝復興の果を結ばしむ。歷史は社會的事業である。法律の功は一人に收むべくもない。政治は一人を其の對象としない。經濟技術の諸制度は皆萬人に趨いた跡の記錄に過ぎぬ。人は人と動く、其處に文化があり、其處に歷史がある。

今歷史的文化價値と稱せらるべき Hegel の objektiver Geist の諸價値を見るに、其の實現に於て皆共に歷史的發展の濤にゆられ、現實理想の距離に憂ひ、人と人との協力に俟たざるべからざる其の本來の內在的條件に制約せらるゝこと最

も分明てある。之に反して其の absoluter Geist として擧げられたる藝術、宗教、哲學に至つては甚しく其の面目を異にして居る。何人かあつてラファエロの後に復たラファエロを思ひ、ベートーヴェンの後にベートーヴェンを尋ね、プラトーン、カントの後にプラトーン、カントを稱し、釋迦基督の後に同じき釋迦基督を擧げんとするものがあらう。彼等は彼等自身に於て自足圓滿完了の意味を語るべし。何人かあつて其の中に發展の餘地を思ひ、現實理想の距離を嘆き、他の凡庸と俊秀とを驅つて其の完成を期せしむるものがあらう。彼等は彼等自身の內部に於て既に完了を示し、統一を說き、自立を證するてあらう。歷史の浪、發展の流は彼等を攫ふべくもない。實在當爲の鬪爭は彼等の關せざる所てある。蠢々たる人のどよめきは抑もや彼等の曰に如何に映ずるてあらう。雲際に屹立したる孤峰の面影や正さに彼等を傳ふるものてある。

此の如くして objektiver Geist と absoluter Geist との諸價値の間には確かに相互に區別さるべき深き洞察を吾等に要求せざれば止まぬ。一は發展的他は自足完了的、一は乖離的他は統一的、一は社會的他は個人的てある。(2) 一は社會的文化の性質を示し、他は個人的天才の意味を語る。一は社會の內的構造を論理的に傳へ、他は個人の尊嚴と驚異とを全部的意味に於て發揚せんと欲す。社會對個人の深き意味は此の問題の尋究に待たねばならぬ。吾等は吾等の眼を玆に向はしめざるべからず。玆處に問題解釋の鎖鑰は橫はる。幾多の價値學說中 Hegel の此の點に關する諒解は、吾等が有する思想發展の歷史に於て比較を絕して尊重に値するものと言はねばならぬ。吾等は此の貴むべき思想を追隨するに於て幾多の重要なる且深刻なる問題に遭遇することを否み能はぬ。Hegel によつて提出せられたる解釋は更に後代吾等の沈思を要求する問題てある。余は今此の問題を心に思ひ浮ぶるに於てすら限りなき喜悅の情を覺ゆるを禁じ能はぬ。

(2) Mehlis の前揭書に於ける解釋を參照せよ

唯、Hegel が歷史的價値なりとしたるものゝ中につき特に吾等の注意を惹く

は道德的倫理的價値である。眞、善、美、聖は殆んど凡ての學者に依つて、殊に近時の價値哲學論者によつて全く同一の取扱を受くるのみならず、却つて他の論理的並に美的價値に對しても Sollen の觀念を援用せしめんとするほど倫理的價値は其の模範的役目を演じつゝある。此の意義に於て Hegel が倫理道德の歷史性を高調して藝術、宗教、哲學と區別したるは頗る異色とすべきものたるを失はぬ。乍併疑ひは亦必然此の點から始まらねばならぬ。

Absoluter Geist の所產が超歷史的であり統一的なることは前既に見たる通りであるが、之と全く同じ意味に於て倫理道德を解することは果して不可能であらうか。余は古への所謂「聖賢」に顧みても當に之を疑はんと欲するものである。加之政治、法律、經濟、特殊科學、技術其の他各般の Hegel が所謂 objektiver Geist に屬する價値の全部に亙りても、其の價値其自身の論理的意義は云ふまでもなし、更に之を實現する過程として解せられたる各般の社會的文化生活に於ても、其の之を實現する態度及其の所產の內に又能く超歷史的、個人的且統一的自足完了の意義を見出し得べきを信ぜんと欲するものである。吾等はダンテ、ゴェテ、モッツアルト、近松又はアウグスティン、エックハルト、日蓮さてはアリストーテレス、デーカルト、スピノザ、ヒューム、フヰヒテ、シエリングを思ふと同じ意義に於て、其々の異なりたる範圍に於てナポレオンビスマーク、ユスチニアーヌス、コルベーヤ、グロンウエル、ガリレイ、ニュートン、ローレンツ、ダーウヰン、ロバチェウスキーを思ひ得ぬか。

余は一定の觀點に引き直ほされたる場合に於て凡ゆる範圍に亙りて客觀的歷史的文化價値並に其の實現の過程と解釋さるべき歷史的文化生活が藝術、宗教、哲學の諸價値が個人的、超歷史的、統一的、自足完了的と解せらるゝの意義に於て、全く之と同じ意味に於て等しく又超歷史的、個人的、統一的、自足完了的と解釋され得ぬとは思はない。吾等は渺たる一經濟生活に從ふもの、一技術生活に從ふものに對しても尙晩年の Kant と共に之に對して人格の尊嚴に對し畏敬の念を胸に秘するを禁じ得ない。凡ての事業、凡ての力作は其の人格の發露として個人的、統一的、自足完了的なることを思はざるを得ないし、又此の內的意義が其

の表現の寧ろ或意味に於て外緣とも稱さるべき文化生活從つて其の係はるべき範圍内の文化價値の種類の異るに從つて、或は統一的に或は乖離的に、或は自足的に或は發展補充的なるべしとは考へ得ない。此の意味に於いて objektiver Geist に屬する諸價値と雖も或る觀點よりしては absoluter Geist に屬する諸價値と同樣の考察を容れ得べきものであると信ずる。此くして始めて各種の事業、各種の努力は價値實現の過程と解釋せらるゝことに於て皆一樣に人格の尊嚴を語り得るに至るものである。

之と反對に absoluter Geist に屬する藝術、宗教、哲學の諸價値と雖も、一朝亦其の立場を變じて objektiver Geist に屬する諸價値を觀察したるものに同じくせしむるときは、後者が歷史の上に發展的、現實理想に關して乖離的、其の實現の地位に就きて社會的なると同じく、發展的、乖離的、社會的なりと觀察し得ることも決して不可能ではないと思ふ。現に Hegel に於ても無論歷史的に言ふ發展の意味に解せずとも Dialektik を追ふて其の理念開展の跡を辿り、殊に哲學即哲學史、哲學史即哲學の立場を採りて玆に偉大なる思想體系の收結を示したるは必ずしも此間の消息を語るものに非ずとは言ひ得まい。モツアルトの後にベートーヴェンと ワグナーを思ひ、カントの後にフヰヒテ、シエリング、ヘーゲルを思ふことに必ずしも如何なる立場もあり能はずとは言はれまい。唯だ藝術、宗教、哲學に於ては既に悉く其の價値は其の本質に於て實現せられ終りたるが故に、進歩を云爲し得るは此の既に一度實現せられたる本質本領を只體系に組織し之を擴大し之を豐富になすことを得るのみ、其の價値の本領に於て發展的なることを得ずと云ふものもあらう。[3] 又は Herder の如く Humanität のイデーが實現せられたるときには如何なる時代、如何なる處、如何なる國民を問はず其處に文化の目的は充さるべし、何爲れぞ時代より時代を追ふて進むの發展あらん、希臘の彫刻、中世の神秘主義、獨逸の理想哲學の如きは即ち奈何と、云ふものもあらう。乍併前者に對しては余は答へて曰はう。例之特殊科學として見たるユークリッド幾何學が有する其の本然の內面的價値は非ユークリッド幾何學の現出によつても動搖

は來されぬ。其の意味は其の特殊科學の範圍内に於ける妥當性につきて言ふのではない。如何なる學説でも其の完了したる組織體系の内に保有する其自身の内面的價値につきて云ふのである。而して此の如き價値は新學説の發見によつて毫も動搖さるべきものにあらずといふことを言ひ表はしたい。恰も地動説の現出によつて全く排斥し去られたる其以前の反對の學説が、其の自足完了したる組織體系の中に有したる其の本然の價値は地動説によつても動かさるべきではない。猶ほ復讐が德川時代に有したる善の意義は、今日の改變せられたる道德觀念によつて寸毫もその内面的意義は左右せられ得ざるが如きである。蓋し當爲の普遍的妥當性なるものも其の根據を茲處に据えつゝあるものである。プラトーンのイデア論、佛陀の體驗、ミケランジェロ、ベートーヴェン作品の内面的自立性と雖も、到底此の意味以外にはあり得ない。此の點に於て absoluter Geist と objektiver Geist との間に發展進歩の意味に二の異なれるものありと觀ずるは誤まつて居る。若夫ヘルダーの意味に於て進歩發展を否むとの意義に於ては是豈藝術、宗教、哲學のみに限らうや。凡ゆる社會的文化生活の所産及び其の係はるべき範圍の文化價値に於ても亦同樣のことが言へるであらう。佛國ナポレオン時代の法典、英國の金融系統、獨逸戰前の行政組織、善き意味に於てか惡しき意味に於てか何れか其々特有の其自身の自足的意味を語らざるものがあらう。此の如く absoluter Geist は發展的、乖離的、社會的ならずと言ふと雖も、其の他の objektiver Geist に屬する諸價値が發展的、乖離的、社會的なりと言ふの意味に於ては、absoluter Geist に屬する諸價値も亦然りと主張し得ることは余は決して誤まれりとは思はぬ。

(3) G. Mehlis, a. a. O. S. 525ff.

此の如く論じ來れば、absoluter Geist に屬する諸絶對價値は個人的、統一的、自足完了的であり objektiver Geist に屬する諸客觀價値は社會的、乖離的、發展的であるとして、此の間に截然たる區別の存するものあることを主張するは未だ遽かに然りと斷ずる能はざるものがある。一方前者と雖も後者を社會的、乖離的、發展的

と云ふ意義に於ては亦然りと言はざるべからざる理由あり、他方後者と雖も亦前者を個人的、統一的、自足完了的なりと言ふ意味に於ては同じく亦然りとせざるべからざる根據もある。乍併茲に問題はある。飜つて靜に考ふれば價値を考察するに際し兎も角一は個人的、統一的、自足完了的、他は社會的、乖離的、發展的なりとすることを得る立場のあり得ることは確かなりとすれば、茲に吾等の沈思を要求すべき問題は伏在しないであらうか。余は此の問題を考へて見たい。

上來の記述によりて明かなる如く果して此の二つの立場が價値其のものゝ種類を分別することを得ずとするならば殘る可能性は價値の種類に關するものでなく、價値を見、之を考ふる立場の相違に歸せざるを得まい。即ち價値は其の間に何等の種類分別を施すことなく其のあるが儘に吾等の考察に委ね、唯其の考察の立場に分別すべき所あるを示すものでなくてはならぬ。即ち價値は absoluter Geist と objektiver Geist とに分たれて各特殊の種類のもの之に屬すとし一方を Abschluss-, Vollendungs- oder absoluter Wert と名づけ、他方を Fortschrits-, Beitrags- oder Annährungswert (Mehlis) と名づくる如きは誤まりであつて、此の觀點よりして論ずれば價値の如何なる種類のものと雖も凡て皆觀點の相違に從つて此の兩者の何れにも屬すべきものなることを示すものである。余は前段に於て文化價値の階段說を排したが、今復た文化價値の種別論を斥けたいと思ふ。

五

今茲處に吾等が檢したる價値の見方の二つの立場は恐く更に深き意味を露はすものではあるまいか。余は之を次の如く解せんと欲するものである。

凡そ如何なる種類の文化價値なるを問はず、开が特殊科學、政治、法律、經濟、技術、宗教、藝術、倫理、哲學等の各範圍に於て、其の係はるべき各般の文化價値は凡て皆一樣に人類歷史の所產として發展進步の可能を思ひ、社會萬衆及び歷代協力の結晶として其の完成、其の理想の實現を遠き吾等の未來に托せざるべからざる一面あると同時に、如何なる範圍に於ても、如何なる時代、如何なる民族の中に在つても、一個の天才超人あつて其の解釋を許さるべき方面の價値に係はりて時

處を絶し、人を超えて其自身の內面的意義を端的に發揚し、自足圓滿完了的に其の統一調和の相を現顯し得べき他の一面ある事は疑ふべくもない。一は價値の經過を思ひ他は價値の意味を探る。一を課せられたる問題を解釋し之を實現する方面より觀察するものとすれば、他は端的に價値其自身の意味を語るものである。凡ての價値は即ち此の二面を有す。價値に對する此の一面の解釋を呼ぶに斯學通行の概念「文化價値」を以てすべくんば、他の一面の解釋を名づくるに余は「創造者價値」(余に造詣を許せ——„Schöpferwert")を以てしようと思ふ。蓋し一面は歷史的、社會的にして其の目標はカントの意義に於ける自由である。他面は即ち超時的、個人的にして其の目標はヘーゲルの意義に於ける絶對(Das an und für sich seyende, das unendliche in sich vollendete oder beschlossene Sein ——das Absolute)である。(1)

(1) 文化價値對創造者價値の區別すべき三個の對立せる目標の內、文化價値を社會的、創造者價値を個人的なりとすることは重要なる意義に於て大なる制限を受くべきことは後段に述ぶる所を參照せられんことを切望す。

惟ふに社會の意義は文化に盡き、個人の意義は創造に終る。社會と個人とは同一價値の兩面に於て解釋せられたる二ッの負擔者の謂ひである。兩者が如何なる關係に立つべきやは同一價値の兩面に於て一は文化價値他は創造者價値と解せられて此の兩者が如何なる關係にあるやの解釋に倚屬すべきものである。余は今此の兩者の價値の關係を明にしやうと思ふ。

文化價値の全部に互りて其の體系を形成せんと欲するは余にとりては寧ろ無益の企てである。其のあり得べき種類を數へ上げ、或は之を分類して一を他の部類に抱擁せしむるに、人類歷史の發展と經驗の限りなき增大とに備ふる爲め、所謂 das offene System (2)を樹立することも亦余にとつて無用の業である。余が上來屢々述べた理由の下に一文化價値が其自らの認識論的根據を得、其自らの認識目的を明にし得た場合には其の文化價値は他の文化價値と並列して其の系列中の一ッの地位を得べきを以て足れりとする。之を必ずしも眞、善、美、聖

の四に限らざるべからざるの理由はない。況して此の如き das offene System によりて並列關係の中に在る一員を抽出して他のものに對して階段上の上位にあるものと解せしむるは、更に其の相互の關係を却つて闇晦ならしめこそすれ、諸文化價値の聯關倚屬的、乍併獨立的關係に對して正しき了解を齎らしむる所以ではない。余は文化價値の種類を限定せざるべからずとするの理由を發見し得ない。

(2) Rickert 前掲論文及び米田庄太郎著リッケルトの歴史哲學第五三五頁以下參照

唯諸文化價値の依つて以て存在し得べき基調、一文化價値より他の文化價値の分れて其自らの認識論的可能の根據を確かめ得べき根基、兼ねて此等諸文化價値の極限概念として其の目標たり、其の歸趣たるべき文化價値一般が可能なり得べきことは閑却してはならぬ。カント流の解釋に從へば是ぞ人類文化終極の歸趣としての自由を意味するに外ならぬ。自由の完成とは即ち文化價値一般の內容的實現を意味する形而上學的概念事ろ信念である。

此の如き特殊の諸文化價値に對する文化價値一般のあり得べきことは吾等が若し諸文化價値の論理上成立可能の根據に想ひ到ることを得ば明かであらう。即ち此の基礎の上に一文化價値は特定の內容を得て其自身完了の意味を語り得とする處に其の成立可能となると同時に、其の文化價値によりて其の內面的意味を統一的に語り得ざるものあるに至つて他の文化價値の成立し得べき根據の存するを思ひ得るは唯其等が共通の基礎の上に於てのみ可能なることは明白である。此の基礎は即ち諸文化價値をして可能ならしむる認識論的根據なると同時に、他方諸文化價値の分れて存する最後の歸趣を示すものでなければならぬ。換言すれば諸文化價値は特殊の形式に於て表現せられたる文化價値一般である。文化價値一般は此の意義に於て諸文化價値の根據であり、歸趣であり目標である。

創造者價値に至つても亦全く文化價値に於けると同一の理由を以て其の價値の種類を擧げ盡すの必要はない。文化價値に許すべき丈の數多き種類は又

創造者價値に於ても之を認むべきてある。天才的創造者は藝術にのみ限らない。哲學にのみ限らない。宗教にのみ限らない。些末なる技術にも、經濟にも、教育にも其自らの內面的意味を語るものとしては創造者を缺くものてはない。カントが嘗つて哲學を以て天才の業に非ずと言ひたるは唯彼の主張する意味に於てのみ有意義てある。カント自身の哲學を以て天才の業の好適例なりとなす後世の哲學史家は恐らく十九世紀に於ける物理學、化學、數學、醫學、社會諸科學に亙りて將又技術、經濟、軍事の諸制度に於て程度の差こそあれ天才的創造者を見出すに苦しむことはあるまい。余は個人的、統一的、自足的に其の內面的意味を發揚し得とする創造者價値を又文化價値に於けると同樣に眞善、美、聖の四範圍のみとして限定せざるべからざる必要と理由と根據とを發見し得ない。吾等が注意すべきは其の種別ではない、其の Wertordnung ではない、其の意味のみてある。

文化價値の範圍內に於て文化價値一般を想定したる思想は創造者價値の範圍內に於て其の凡ゆる種類の價値をして可能ならしむる基調としての創造者價値一般又は單に創造者價値を想定する思想と相應ぜねばならぬ。是れ全く Symmetrie の要求に應ずるの理由によつてではなく、各種の創造者價値を通じて其の凡ての根底に横はり兼ねて此等を統一に導く所以の意味に於て一般的創造者價値を思はざるを得ないてあらう。

此の如き一般的創造者價値あつて其の基礎の上に各種の諸文化價値に相應ずる範圍に於て各種の創造者價値が可能となるものてあり兼ねて又そは實に其等各種の創造者價値に對して其の歸趣たり目標たり得るものてある。兩者の關係は恰も文化價値一般と諸文化價値との關係の如く、一を Gattungsbegriff とすれば他は其の Exemplar として觀察し得べく、一を以て他の das konkrete Universale とするヘーゲル流の解釋も亦此の點に於て許され得べきてあらう。

此くして一方には文化價値一般及び各種の文化價値が想定せられ、他方には創造者價値一般及び各種の範圍に亙りての特殊的創造者價値が想ひ設けられ

ねばならぬ。而して此等は既に明かに述べた如く價値其ものゝ分別されたる種類ではない。同一價値の二の異なれる方面の見方を意味するに過ぎない。從つて一方には文化價値、他方には創造者價値の解釋を許さるべきものは其の根柢に於て同一價値でなければならぬ。此の如き文化價値一般及び創造者價値一般の二方面的解釋を許す價値を余は單純に價値又は價値其のまゝ(Wert schlechthin)と名づけて置こう。斯學慣用の概念を以てすれば絶對價値、純粹價値(absoluter, reiner Wert)とも稱すべきであらう。而して各種の範圍に亙りての文化價値及び創造者價値例へば學問的、藝術的、宗教的、倫理的、法律的、經濟的等の文化價値及び創造者價値なる二方面の解釋を許す價値は、余は之を便宜上夫々此等を形容詞としたる價値例へば學問的、藝術的、宗教的、倫理的、法律的、經濟的等の價値と呼ぶを以て至當と思ふ。

即ち各種の而して凡ゆる價値は其の解釋に兩面を有す。一は其の實現の過程に於て歴史上發展的の意味を寓し、從つて歴史を以て其の實現の位置とするが爲に社會的であり且其の理想と實現との距離は常に乖離的なるを思はしむ、其の實現過程の目標となり歸趣となり究極となるものは即ち文化價値である。他は其の實現の過程に於て時の流を超ゑ、歴史を以て其の直接係はるべき位置とせざるが故に、其の意味に於て自足完了的であり個人的である、且其の理想と現實との距離を端的に征服するの意味に於て統一的である。此の如き意味に於ての價値は即ち創造者價値である。重ねて曰ふ。文化價値と創造者價値とは同一價値の解釋の異なれる二方面である。價値其のものゝ性質として一は進歩發展的他は自足完了的、一は社會的他は個人的、一は乖離的他は統一的なるのではない。凡ての思惟を排却すべしとは思惟すること能はず、凡てのものを疑ふべしとすることを疑ふ能はざると同じく、發展的なりとするものゝ基礎其自身は發展的なること能はず、乖離的なりとするもの自身は自ら乖離的なることを得ない。文化價値が創造者價値と相對して發展的、乖離的なりといふは價値自身の性質として發展的、乖離的なる能はざるは言ふまでもない。唯其の實

現の過程に於て此の如き性質を其の特性とするが爲に此の如き解釋上の區別を擧ぐるに止まる。價値其自身として文化價値、創造者價値は共に其の係はるべき範圍内に於て圓滿具足統一絶對なる一個のイデーであり、一個の當爲であり、一個の規範たるに些の差違あるべき理由はない。價値は其の解釋の如何によつて價値其自身たることを失ふものではない。恰も學問的價値が價値其自身としては藝術的價値の價値たる所以と些の異る所あらざるべきと全く同一である。假令學問的價値と藝術的價値とは異なる所あるにしても是亦畢竟内面的に同一なる價値の方面的解釋を異にするあるのみ。文化價値と創造者價値との關係も亦全く之と同じである。價値としては如何なる意味に於ても永久に價値である。

六

價値は其の實現過程に顧みて一は文化價値として社會的、發展的、乖離的であり、他は創造者價値として個人的、自足完了的、統一的であることは今吾等が之を明にしたる所であるが、然らば此の二は其の價値實現に於て常に必ず相照應し、創造者價値のある所文化價値之に伴ひ、文化價値のある所必ず創造者價値ありと見るを得べきか、或は常に必ずしも相伴はず夫々獨立の意義を夫々特殊の位置に於て發揚するを常とすべきか、若しくは兩者全く相伴ふこと能はざるを以て其の本然の性質より來るべき歸結なりとすべきか。此の解釋の如何は又延いて近世特に十八世紀以來益〻客觀的獨立の意義を發揮し來りたる「社會」に對する個人の關係を究むるの根據如何に對して一の深き意味を示す所以であると思ふ。個人主義は飽くまで個人の尊嚴を維持し之を發揚するに於て社會は第二次的たるべしと主張するであらう。社會連帶論者は又之に反して終には之を徹底的に論ずれば恐く全く個人を社會の中に吸收し終らざれば止まぬであらう。二十世紀に於ける吾等は最早此の間の矛盾を去り調和を立つるに於て Geulincx, Spinoza を享けて Leibniz が稱へたる如き論構を以てする harmonie préétablie を以て滿足すべくもない。又個人の利益は知らず識らず社會の其に合

致すべしとする A. Smith の說(1)を受けて Bastiat が經濟生活に關して稱道したる如き harmonies も吾等の理論的要求を充たすべくもない。余は玆に社會對個人の問題につきて其の解釋を迫るべき例證の一々につきて、如何に此の問題が現時社會的文化哲學の研鑽に從事するものゝ頭腦を支配すべき理由あるやを指示するは餘りに事明白にして無益なりと信ずる。各般の社會的問題にして其の究極に於ける解釋の分るゝは、皆一に此の社會對個人の關係を如何に見るやの異なるによつて然るものである。余は余の上來記述したる文化價値の理論によりて、社會對個人の關係は解明され得べきもの而して又されざるべからずと主張せんと欲するものである。

(1) "Every individual is continually exerting himself to find out the most advantageous employment for whatever capital he can command. It is his own advantage, indeed, and not that of the society, which he has in view. But the study of his own advantage naturally, or rather necessarily leads him to prefer that employment which is most advantageous to the society." (A. Smith, Wealth of Nations. vol. II. London. 1776. p. 32.)

價値は其自身として其の性質の差異を惟ふことが誤まりなりとすれば、其の實現に顧みて解釋の方面を二に分たれたるものとしての文化價値と創造者價値とは社會對個人の問題に關聯して之を考ふれば兩者相互の關係を如何に見るべきや。今例示によりて此の間の關係を明にして見たいと思ふ。

玆に一藝術的天才あり。深く自ら信ずる所に從つて從來の傳統を破り且之に反抗し其自身固有の內面的意義を發揮すべき一個の作品を世に出したりとする。恐くは同じく藝術的生活に從ふものゝ間にあつても之を了解することなく政治生活、法律生活道義生活、宗教生活に從ふものゝ裡にあつては啻に之を了解し之に同情する能はざるのみならず、恐くは之に壓迫を加へ之が滅絕を期せんとする如き又は此の如きことを期したることは古來歷史の上に決して類例に乏しかつたことではない。學問的天才の場合に於ても、社會改良家の場合に於ても、亦其の他の範圍に於ける天才の場合に於ても、同樣の事例は擧げて數ふべからざるものがある。古へも然り、今も然り、將來も亦恐らく然らざるを得

ないてあらう。此の場合には創造者價値と文化價値との上來の解釋に照して果して何を意味するであらうか。

此の場合に於ては言ふまでもなく一新創造者價値が實現せられたるときは、此の特定の範圍に於て既に實現せられたる文化價値と此の新創造者價値との間に相互に了解を缺くほど大なる距離あることを示すものなると同時に、他の範圍に於ける文化價値實現の過程に對しては、此の如き新創造者價値の實現は之に止らず、進むでは恰も其の固有の價値實現過程を妨げらるゝの感あらしむることを示すものである。或る特定の文化價値の實現せられたる階段に於ては其の具體化せられたる文化價値は一個の共同財 (Gemeingut) と稱すべきであらう。創造者價値は其の範圍に於ける共同財との間に於ける距離が餘りに大なること上の例の場合の如きに於ては、其の共同財の側より見れば全然之に對する了解を缺くものであり、他の範圍に於ける共同財の側よりは猶其以上に殆ど背反對峙の關係にある如き思ひを抱かしむる狀態に至ることあり得べきである。而して此の如き場合は多くの天才的創造者が嘗めたる悲慘の歴史の拙からざる類例を示すものと云ふことが出來る。之に反して一創造者價値が實現せられたる場合に於て單に驚嘆すべき一個の傑作なりとして享け容れられたる場合に於ては、其の範圍に於ける共同財との距離は打勝たれ得べきものなることを示し而して他の範圍に於ける共同財とは相協調を保ち得べき關係にあることを示すが故に、新に實現せられたる此の特定の創造者價値は其の傑作、新發見、新發明として享け容れらるゝ瞬間に於て、直に其の範圍に於ける文化生活に於て共同財として觀察せられ得るが故に、此の場合に於ては文化價値實現の過程に於て何等の支障なく其の一歩を進め得たるものと云ふことが出來るであらう。此の如くして一歩は一歩に近づきて且全範圍に亘りて其の實現の歩武を進め、此くして文化生活の理想として歴史の終極目的たる文化價値一般の內容的實現をすら思はしむる如き形而上學的信念を喚び起すに至るであらう。此の如き場合に於ては創造者價値の實現は即ち其の反面に於て文化價値

實現の過程其自らと何等の異論なく觀察せられ得るものである。之に反して前に例として擧げたる場合に於ては反對に創造者價値が豫言者鄕黨に容れられざるの趣きを傳へて孤影茫然同情すべき多くの天才超人が經驗したる苦腦の傷ましさを吾人の面前に展開したるものである。而して此の如き運命の下に弄ばるゝ創造者は決して稀なりとは言ひ得ない。一天才によつて爲された努力が數百年の歲月を經て始めて後代に知己を得るの例も亦決して尠くはない。創造者價値と文化價値との並行は必ずしも常に望み得る所でもなく又況んや常に見得る所でもない。否、新創造者價値が共同財の標準を去ること遠く、其の距離の大なること甚しきものに至つては創造者價値と文化價値とは相伴はざるを以て寧ろ常態なりとなすことは決して不當なりとは云ひ得ない。是悲しむべきではあるが而も事實なるは否むべくもない。此の如くして更に之を徹底的に論ずれば恐くは歷史上永久に文化價値と相遭ふことなくして埋沒せられたる創造者價値も決して少くはなかつたらうと想像することも亦不可能ではない。幾多の天才が轗軻不遇の裡に其の夢の如き一生を終へた涙の歷史は程度の差こそあれ皆共に此の間の消息を明瞭に傳ふるものである。

此の如くして文化價値と創造者價値とは實際歷史生活の上に於ては兩者相照應し且相伴ふの場合も數の上に於ては決して尠いとは云へないけれども、特に吾等の注意を惹く意義に於てすれば、兩者相伴はずして或は其の儘に其の意義を永久に失ひたるべしと想像し得る場合、或は假令此の如からずとするも其の兩者の距離の征服に幾多の歲月幾多悲慘の犧牲を要求したる類例も亦決して尠くはない。前者の場合に於ては別段に吾等の問題とはならない。所謂社會と個人との協調は玆に保たれ之によつて凡ゆる種類の社會對個人の偕調說は稱道せられ得べきである。之に反して吾等に問題たるは後者の場合である。創造者價値は儼として其自身に固有の內面的意義を語るものでありながら、文化價値實現の過程に入り得るまでは——幾多の歲月、幾多の曲折が其の間に橫はることであらう——讒に獨自完了的意味の內に自ら滿足するに止まらねば

ならぬ。而して更に進むては此の獨自完了的の意味の裡に滿足するに止まること未來永恒に亙らねばならぬこともあり得べきである。茲に創造者價値の悲哀があり而して又他面其の尊嚴がある。

余嘗つて大平洋を航行して月明の麗かなるに終夜の歡を貪つたことがあるが、島も見ゆるなく鳥さへ飛ばざる太洋の唯眞中に、吾等が航行する船ありたればこそ其の浪の上に輝く月の光をこそ見たれ、若し船の其處に航することなくば月は見らるる人もなく、況んや自ら求むるなく怨むなく終夜其の光を放げつゝあつたであらう。余は幾年後の今日猶ほ此の想ひを忘れ能はぬ。今創造者價値を思ひ而して文化價値實現の過程に沒入するに至るまでは又は永久に沒入することなくして、其自身の內面的意義を語るに止まるべきものあるを想ふて端なく當時の余の感想を茲に再び喚び起さざるを得ない。余は無心ながら月の敢て求むるなき偉大と尊嚴とに對して轉た畏敬の感に打たれたが、創造者價値に對しても亦圓滿具足完了の意味の裡に自らを統一して他に求むるなきの偉大と尊嚴とを思はざるを得ない。社會を放れて個人の尊嚴人格の Würde は究極の根據を茲處に据ゑつゝあるものであらう。

乍併文化價値と創造者價値とは永久に相會はざるべきことあるも亦其の本然の性質より然らしめらるべきことなるか。此の問題は更に沈思を要求すべきものである。偶、歷史の上に於て此の如き類例に乏しからざるべしと類推せしむる者あるは、此の兩者の價値の性質より必然論理的に導き出さるべき結果なりと考ふべきか。

惟ふに創造者價値の實現に從ふ天才は畢竟一個の人として歷史の浪の中に搖らるゝものと解釋し得る一面ある以上、其の實現せらるゝ創造者價値の內面的意味が假令歷史を離れ發展を脫して猶且其自身固有の立場あり得としても之を文化價値と交涉せしめて觀察し得べき一面の存在せざるべからざることは蓋し否み得ない。從つて此の意義よりすれば永久に相背反し相接觸せず文化價値と何等の交涉に立たざる創造者價値を考ふることは論理上に於ては不

可能と云はねばなるまい。況んや創造者價値と文化價値とは價値の分別されたる種類に非ずして、同一價値の二ッの異れる方面の解釋に過ぎずと解するに於てをやである。而かも他方には創造者價値の實現が文化價値實現の過程に於ける共同財に對して何等の了解を得ること能はず又は背反對峙の關係に立ち而して永久に兩者の合致を見ることなくして終ることあり得べしと考ふることも强ち無稽には非ずと云ひ得る。此の如く一方には兩者合致の論理的要求を思はざるべからざるの一面あると同時に、他方に兩者背反の實際的事例を擧げ得る他面あることは否み得ない。此の Dilemma は如何に解くべきか。

一創造者價値が文化價値實現の過程に沒入すること永久に之なくして而かも其自身固有の內面的自足完了の意義を有し得べしとするの根據は、此の場合に於ては其の反面の解釋たる文化價値に係はらしめられて然るものに非ざるは云ふまでもない。何となれば文化價値と永久に合致せざる場合に於て一創造者價値の內面的意義を定むるに猶ほ文化價値に係はらしめんとするは、恰も有なる概念に係はらしめて其の反對なるものとして初めて意味ありとせらるゝ非有、無を抽象的に有に係はらしめずして具體的概念として思惟すべしと云ふの、吾等の場合とは全然反對の立言が論理上不可能なると全く其の揆を一にして居る。創造者價値が永久文化價値と相遭ふことなくして猶能く其自身自足完了の意義を有し得べきや否やの標準は、唯一に其の創造者價値の依つて以て係はるべき其々の內在的價値(例へば自然科學に對しては普遍化概念構成上の價値)に照して可能、不可能が判斷せらるべきである。此の如くして一旦其々の範圍內に於ける其々の認識目的に係はりての價値に照して其の可能が基礎づけられたる一創造者價値が成立し得たりとして、而かも此の如き孤立的創造者價値が唯、內面的自足完了の意義を獨自に語るに止まるものとしたる場合には、其の反面の解釋たる文化價値に對する關係は抑、如何なるべき。

余は此の場合文化價値と創造者價値とが合致すべき論理的要求の必然なる方面と、兩者永久に合致せざることあるべき實際的歷史上の事例が可能なるべ

き方面とに顧みて此の兩者の關係を二に區別して考ふる必要ありと考へる。即ち前に曰ふた通り兩者合致の論理的要求として示さるゝ如く、此の如き永久に相會はざるべき孤立的創造者價値も亦何等かの意義に於て文化價値の反面的解釋として見られ得る考察なからざるべからずとする方面と、之と反對に兩者が永久に合致せざることあるべきを思はしむる實際的事例に合する如く一孤立的創造者價値が如何なる意味に於ても文化價値と永久に交渉に立たざるものなるかの感を抱かしむる方面とである。前者の場合に於ては天才と雖も亦人類の一員として歴史の波に搖らるゝ以上、其の外部に發表し若しくは發表せざる價値實現が假令時の上に於て過去現在未來の永久を貫き、處の上に於て東西に亘り何人によつても了解せらるゝことなしとしても、猶且文化價値の實現と解釋せられ得べき一面を要求するの根據ありとすれば、开は其の創造者價値の實現者たる天才も亦等しく文化價値實現の過程の裡に其自身固有の位置を見出し得べき一員なることによつてのみである。之に反して兩者永久に相合致せざるべきことあるを思はしむるは、文化價値實現の過程にある一定の社會の範域以外に此の創造者を排却して考ふる場合でなければならぬ。即ち文化價値を考ふる場合に其の性質の社會的なりと云ふことを强調するが爲めに、其の孤立せる創造者價値を解して唯個人的なりとして之を享け容れざる場合である。即ち前者の兩者合致の論理的要求を充たさしむべく考へらるゝ文化價値は孤立の創造者一人によつても實現せられ得ることを思ふものであり、即ち此の意義に於ては文化價値は社會的ならず個人的なることを得るものなりと解釋せらるゝものであり、後者の場合は之に反して兩者が永久無關係なるべき實際的事例に適はんと欲するものであり、文化價値を解して何人も了解し得ざる孤立の創造者價値を其の內に含ましめず、即ち文化價値は如何なる意義に於ても社會的なるべしと思ふに在る。前者は一人の天才によつて實現せらるゝ文化價値を思ひ得べしとし、後者は何等かの意義に於てか一人以上の社會によつてのみ實現せらるゝ文化價値を思ふものである。前者は文化價値を以て

其の實現過程に顧みて發展的理想實現に於て常に乖離的なるを思ふも而かも凡て人類の努力は初めは何等かの意味に於て程度上の差こそあれ孤立的創造者の努力を以て其の端を發し、他の人類は遲速、難易の別は兎も角、之に隨從するによつて共同財を成立せしめ得るものなりと見れば、多くの場合に於て文化價値は社會的なりと解すべしとしても、又尠からざる場合に於ては假令之に追隨する社會の理解はなくとも一の孤立的創造者價値によりて猶能く文化價値は實現せらるゝものなりと解し得るが故に、此の意味に於て文化價値は個人的なり得と解釋せんと欲するもである。之に反して後者は文化價値を以て發展的、乖離的且嚴正に社會的なるべしと解釋するものである。

余を以て之を見れば前者の論理的要求を充たすべく考へらるゝ文化價値對創造者價値の解釋を以て當れりと云はねばならぬと思ふ。即ち文化價値の實現は歴史を舞臺とするに於ては發展的乖離的なるに加へて社會的なることを以て常態とするけれども一孤立的創造者價値と雖も其々其の內在的價値に照

イントレ表ハ[illegible]ことば

して可能なるの根據確固たるに於ては、是亦其の範圍に於ける文化價値の實現なりと見ねばならぬと思ふ。是理論上の要求に從ふものなるのみならず又兼ねて歴史の上に於ける多くの學問上、美術上、宗教上、社會改良乃至革命上の天才の偉業の如き皆當さに此の如き解釋を迫るものである。之に反して吾々人類の全部によつて全く諒解を得能はざりし幾多の天才が受け忍んだ慘憺たる歴史は此の一人の天才を抱擁する能はざる社會內に妥當なる文化價値と背反對峙の關係にあることを示すと云ふによりて說明し得る事象である。其の天才を抱擁せざる社會によつて此の如き一孤立的創造者價値が猶文化價値の實現なりと觀察せられ得るまでには幾多の犧牲と幾多の歲月とを要する事も亦歴史の上に吾等が屢見る例である。而かも此の如き歴史上の偶然性によりて創造者價値の其自身の內面的自足完了的意義と價値とは左右せらるべくもなく、亦之か人類の一員として文化の窮極に於て目標として立てる文化價値の實現に係はらしめて觀察せられ得ぬとは思はれない。即ち此の如き全く孤立的な

る創造者價値も亦文化價値の解釋を容るゝ一面あることを否むといふは論理が許さぬ。此の點に於て兩者の價値は合致すべきものと云はねばならぬ。是他面に於て余が上來主張したる如く創造者價値と文化價値とは價値の二ッの異りたる種別には非ずして同一價値の二面的解釋なりとするの當れることを證するものと云ふことが出來よう。乍併此の合致は文化價値本來の意義に於て論理的に基礎づけせられ得べきこと云ふまでもないが、實際の歷史に於ては前述べた如く此の如き孤立的創造者が自己に對峙する社會に對して直ちに其創造者價値の容認を要求し得る場合もあり、其の間多少の歲月、多少の犧牲、多少の努力を要する場合もあり、亦全く其容認を得る能はざることも決してないことはない。最後の場合には或は其の容認を得る手段を缺けることもあらう、到底其の了解を得能はざることもあらう、創造者自ら其の容認を要求せざる態度に出づることもあらう。何れにしても此の最後の場合の類例は決しく尠くはあるまい。況んや一創造者價値が永き歲月の間、多くの犧牲を供する間、端的に自己を除外したる社會によりて一文化價値の反面的解釋としての意味を明にし得ざる歷史上の事實は甚だ多い。否、恐くは程度上の差こそあれ傳統に反して學問上、藝術上、倫理上宗教上、教育上、習慣上、政治上、經濟上、技術上何等かの意義に於て改良乃至革命に志す者は、假令其の內面的價値が夫々の價値に係はりて可能なることが確かなりとしても皆此の悲慘なる運命の下に泣かねばならぬ。人類文化の悲劇は玆に在る。唯、其の創造者自身を包含する人類全部が係はるべき文化の舞臺が歷史であり社會であるの意味に於て文化價値は猶ほ歷史的、發展的、乖離的而して社會的なりと云ふことが出來よう。(2)　而して此の如き文化價値の必ず他面的解釋として創造者價値を思ひ得る處に創造者價値の慰めはある。此の意味に於て天才は孤立しない、必ず其の隨伴者を有する。

(2) 前段第五章註(1)參照

此の意義に於て創造者價値と文化價値との關係は解釋せらるべきものである。繰返して曰へば文化價値と創造者價値とは其の根本の論理的性質に於て

は必ず相照應し相伴ふ者であつて、文化價値のある處必ず創造者價値あり、創造者價値のある處必ず文化價値あるべしと雖も、而かも之によつて各其の獨自の內面的意義を語ることを妨げらるゝものに非ず、相照應し相伴ふの論理上の根據は互に有する獨自の意味を破毀するものではない。蠕つて他方實際歷史上の事例に於ては程度の差こそあれ其の考察に入り來る創造者を除きての社會を對象として考ふれば、此の範圍に於ける文化價値と創造者價値とは常に必ずしも相伴はず相照應せず、創造者價値が何等かの意義に於ける一時的か又は永久的に孤獨の悲哀を經驗せざるべからざることも亦兩者の論理的本然の性質よりして必然導かるべき歸結なりと云はねばならぬ。孤獨なる創造者をも抱擁する文化本然の意義よりすれば、文化價値と創造者價値とは相照應し、相伴ひ、相合致すべきものである、二ッの幷行線の接點は玆處に在る。之に反して此の如き創造者を包容せざる社會を對象として考ふれば、此の第二義的文化價値と創造者價値とは必ずしも相伴はず、相合致せざること二ッの幷行線が永久に接することなきに等しい。後者の場合の文化價値は第二義的ではあるが永久に之と照應せらるゝことなかるべき創造者價値を考ふる場合に於ては、其の實際の重要に於て殆んど第一義の文化價値とも稱せらるべき程である。何となれば此の如き創造者價値が夫々內在的價値に係はりて可能なることが確立せられても、其の創造者以外何人によつても認識の範域內に持ち來されざる以上又持ち來し能はざる以上、其の價値の可能を立證し其の內面的自足完了の意味を語るべき經驗の何物をも得能はぬからである。而して此の如き事例は決して少からざるべきが故に、實際歷史の上に於ては假令文化價値と創造者價値とは何等の困難なく合致の可能を思ひ得ることもあるべしと雖も、又之と同時に兩者を以て全然合致せざるもの、照應せざるもの、相伴はざるものなりとすること普通なりとせしむるに至るものである。即ち兩者の合致なるものは其の創造者を含む意義に於て論理的に可能であり、之を排除する意義に於ては可能なる場合もあれど亦不可能なる場合もあり得べきである。論理上必然の合致を思ひ得

べきは唯、前者の意義に於てのみてある。乍併此の意義に於て創造者價値と文化價値との二ッの并行線が其の延長に於て必ず合すべしとするはKantが Glückseligkeit と Tügend, Legalität と Moralität との無限の延長に於ける必然的合致を思ふものとは其の意味を異にする。Kantの場合に於ては寧ろ信念に其の根據がある。余が文化價値と創造者價値との即時又は多少の時の經過若しくは無限の延長に於て必然的の合致を思ふとするは、其の根據信念の界にあるのではなくして其處に認識論的の根據がある。畢竟文化價値と創造者價値との二の異なれる價値の分別されたる種類ではなくして、同一價値の二面的解釋てあると云ふことと是てある。一面の解釋を許す價値が他面の解釋に全くirrelevantなりとすることは論理が許さぬ。一面を有するものは必ず他の一面を有すべきてある。而して此の一面と他の一面とは同一價値の兩面なるの故を以て創造者價値と文化價値とは其の根抵に於て同一價値を意味せねばならぬ。即ち兩者必然相伴はねばならず、相照應せねばならず、相合致せねばならぬ。

natura non facit saltum とは近世科學が其の劈頭に掲げたる motto であつた。余は此の語を學むで天才は飛躍せずと云はう。飛躍すると見、甚だしきは狂者に近しとするは、之に伴ふ能はざる文化價値實現過程の中に蠢々たる凡人の眼に於て然るのみてある。乍併終極の意義に於て創造者價値と文化價値とが合致すべき認識論的根據ありと主張する吾等には吾等凡人と雖も亦文化の解釋に於ては等しく文化價値に係はらしめざるべからざるの意義に於て天才の途を辿るに原則的不可能はあり能はぬ。追隨の可能なるが故に哲學を以て天才の業に非ずとするならば、人文發展の記錄たる藝術、宗教と雖も亦天才の業に非ずと云はねば論理が立たぬ。否、創造者價値は人文所產の凡ゆる範圍に亙りて可能てあり、而して吾等凡才は文化價値實現の過程と其の意義とを通じて創造者價値の內面的意味を體驗することが出來る。少くとも其の不可能を主張し得べき如き原則は余には考へ能はぬ。唯、其の之を體驗し得るに至るまての創造者價値と第二義的文化價値との間に橫はる所謂乖離の存するあるは當さに文

化史上の悲劇と云はねばならぬ。而して其の悲劇の餘りに多きの傷ましさは、やがて個人對社會の原則的背反をすら思はしむる所以である。

創造者價値の尊嚴に於て個人の意義は盡き、文化價値の完成に於て社會の意味は全し。個人と社會との合致、調和は唯此の終極に於てのみ、此の究竟に於てのみ論理的根據がある。之に反して其の中道に於ては既に見たる如く兩者相伴はざることも決して稀なりとはせぬ。のみならず個人が其の係はる範圍以内及以外の社會(例へば學者に對する其の社會幷に經濟、軍事、宗教の社會の如し)との交渉に於て全く之と相容れざるの關係にあつて止まることも亦甚だ稀てはない。個々の行爲につき常に個人と社會とが其の意味、利害を共にし能はざるのみならず、其の特定の個人が全部の意義に於て社會と偕調を保つ能はざることも有り得べきてある。殊に吾等を刺激するの强さに於ては創造者價値と文化價値、新創造者價値の實現と共同財、個人と社會との乖離を思はしむるものは寧ろ其の感情の上に於ては其の類例却つて其の偕調を保つ場合よりも多しとせしむるものがある。徒らに個人と社會との調和を云爲するものは强ゐて此の關係を無視せんと欲するものに過ぎない。此の故に個人と社會との調和を思ひ得る所以は唯だ一に創造者價値と文化價値との究極的合一點が同一價値、當爲、規範、イデーてあつて、吾等の凡ゆる行藏の目標たり歸趣たるに於てのみ可能なるの論理的根據があるばかりてある。個人と社會との意味、個人と社會との關係は畢竟此の根據を外にしては何等の解釋を見出し得べからざるものてある。

余は此の如くして創造者價値及び文化價値の各〻の性質及び其の兩者の關係兼ねて其の兩面的解釋を可能ならしむる根基としての價値、及び總じて價値の體系を明にするによりてのみ社會對個人の意義を闡明し且之に關聯する各般の問題に對して其の的確なる論理的根據を與へ得べきものと信ずる。此の意味に於て價値の體系を定むるは兼ねて文化哲學の依つて以て立ち得る論理的根基を明にする所以てある。而して本論は其の試みの小さき最初のものたる

に過ぎぬ。　（八、一〇、二八）

個別的因果律の論理

哲學雜誌第三百七十六號（大正七年六月發行）所載同題文訂正

post hoc, ergo propter hoc.
d.i. nach diesem also wegen dieses, fehlerhafter Schluß aus der Aufeinanderfolge auf den ursächlichen Zusammenhang zweier Erscheinungen.

個別的因果律（Individuelle Kausalität）の論理

（哲學會カントアーベンド講演原稿）

一

因果の關係に於て post hoc より propter hoc の意義を其の內に含むと解せらるゝことから、延いて此の因果關係の必然性（Notwendigkeit）を特殊の普遍に倚屬するものと云ふ意味に於て因果律（Kausalität）を Gesetzmässigkeit と同意義に解し來りたることは、Kant が時間概念（Zeitbegriff）と結び付けて次の如く云ひたるによりて最も明かな表明を得たものと云ふべしよう。曰はく

…… die Erscheinungen müssen einander ihre Stellen in der Zeit selbst bestimmen und dieselbe in der Zeitordnung notwendig machen, d. i. dasjenige, was da folgt, oder geschieht, muss nach einer allgemeinen Regel auf das, was im vorigen Zustande enthalten war, folgen,……

(Kant, K. d. r. V. 1. A. S. 200. 2. A. S. 245.)

此の見解は古往今來遍く行はるゝ所であつて現今に於ても Kausalität と Gesetzmässigkeit とは同義に解釋せらるゝことが普通である。Kausalgesetz と云ふことを離れ、Gesetzmässigkeit と云ふことから獨立して因果律 (Kausalität) を考ふることは不可能なりとすること今日一般に行はるゝ定說である。

余が玆處に當面の問題として考究せんとする所は、先づ此の定說に對して若干の補正を施さんとする學說につきて其の當否を檢し、之れによりて因果律と因果法則 (Kausalität und Kausalgesetz) との關係につき多少の論理的考察を同らして見たいと思ふ事である。

因果律を何等かの意味に於て法則性 (Gesetzmässigkeit) から分離せんとするものは之を以て特殊の普遍に對する論理的倚屬(die logische Dependenz)より切り離して考へ得べき可能性を有するものと解するに在る。即ち他と全く獨立したる個々の場合に於て尙因果律は其自身成立し得べしとするに在る。而して之より更に進んで之と關聯して individuelle Kausalität の可能を肯定せんとするに至る。

因果律と法則性とを分離して考へんとするは反言すれば gesetzmässig ならざる因果律を考へんとするものであるから之を可能なりとするは或る特定の認識に關して假令因果律は之を度外視することを得ずとするも、之を以て特殊の普遍に對する關係に非ずと見ることを得るものなりとするに在る。而して此の如きは何等かの意義に於て解せられたる所謂法則的ならざる因果律が實際上の問題としては歷史上の一回限りの生起に於て尙且因果律を缺く能はずとする場合に起り得べきことである。換言すれば自然事實の生起は假令其が其自身としては一回限りの生起なりとしても、之を一の Gattungsexemplar として考へ得べしとせらるゝから、個別的因果律の問題の起るべき實際上の必要は所謂 historische Kausalität の問題が individuelle Kausalität の問題として解せられ得るか或は之も亦自然界の因果律と同樣に法則性と同義に解せらるべきかと云ふことに歸する。之に依つて因果律と法則性とを分離して考へんとするものは、凡そ學的認識にして因果律を範疇として要しながら而かも法則的ならざるものあ

り得とすること、近時の史學認識論に於て主張せらるゝ如き場合に、最も其の顯著なる代表者を見出し得ることは容易に吾等の推察し得る所であり、而して又實際に於て歴史の概念構成を以て自然科學の其に對して特殊性を有し、之に從屬ならずして幷行の地位を與へ得べしとする認識論上、正しく曰へば方法論上の二元主義 (Dualismus) を主張する論者の間に吾等は其の主張を見得るのである。併し此の場合に於ても各論者の說く所は悉く一致して居ない、否吾等が此の問題に關して此の問題の性質より演釋して考へ得べき凡ゆる意見に對して其々相當の代表者を有することは、本問題の攻究上甚だ興味あることと云はねばならぬと同時に、如何に此の問題が其の問題の性質上認識論上の難問を包含して居るかと云ふことを示して餘りあると思ふ。

余は玆に學問上の義務として少くとも最近の認識論家が此の問題に對して如何に考へつゝあるかと云ふことを檢せなければならない。

二

先づ此の問題に關して考へに入り來る論者は Rickert である。Rickert は其の著 Der Gegenstand der Erkenntnis. 3. A. 1915. S. 376ff. に於て das Gegebene (所與) より如何にして學的認識が構成せらるゝやを論ずる條下に於て主張して曰はく、認識材料たる所與は Kategorie des Seins, des Dieseins (der Gegebenheit), der Kausalität 等の所謂 konstitutive Kategorien によりて認識材料たる die objektive Wirklichkeit が形成せられ、之が或は Kausalgesetz 或は史的文化價値の如き methodologische Formen によりて概念的に bearbeiten せらるゝによりて一方に自然科學他方に史學は成立すと。此の論旨につきての詳細の紹介乃至批評は今玆に余の企てんとする業ではない。(1) Rickert の主張の大要は寧ろ一般に知られたるものとして之を前提として只玆には Kausalität と Kausalgesetz とが分離せられて觀察し得とする主張を檢して見たい。

(1) 拙著改刪「經濟哲學の諸問題」第百五拾五頁以下參照

彼は曰ふ。

カントが曰ふ如く客觀的時間的生起は確に客觀的現實體の缺くべからざる一要素であるが、之が因果律の範疇に依つて初めて表はれて來るものであると云ふことが正しいとしても、又之によりて如何なる客觀的時間的變化が因果的に決定せられたる經過であるとしても、一事件の他の事件に必然的に繼起するを以つて直ちに法則的に繼起するものとなすことを得ない。其の理由は die Kategorie der Gegebenheit の下に考へられるゝ凡百のものは必ず一回的且個別的でなければならないし、而して他方に die Kategorie der Kausalität は die Gegebenheit の一定の整齊に過ぎないものであるとするならば、如何なる因果關係も亦一回的、個別的經過でなければならない。又因果律が客觀的現實體の構成的範疇に屬するならば empirischer Realismus の立場から云ふても客觀的現實體は只個別的の因果連結を知るのみである、即ち各實際上の因果連結は他の如何なる實際上の因果連結とも異なると云はなければならないのである。反之法則の概念は普遍的である。其の意味は形式の如何なる概念も常に普遍的であると云ふのみではなくして又或種の普遍的なるもの (Etwas Allgemeines) の普遍概念であると云ふのである。何者凡て自然法則は一般的內容を有するもので即ち因果連結の多數のものに普遍共通なるものを示すからである(a. a. O. S. 412–3.)と。

之を以て Rickert は現實體を begründen する構成的範疇と學的修整 (Bearbeitung) の判斷形式 (Urteilsformen) とを區別せんとする一例として因果律と因果法則 (Kausalität und Kausalgesetz) とを峻別せんとする說を立てたのである。此くして彼は konstitutive Wirklichkeitskategorien は凡て一回的、個別的のものであるから、其の一たる因果律は又當然一回的、個別的たり得として、學的概念構成の一判斷形式たる因果法則とは、之を區別しなければならぬと言はんと欲するのである。從つて余は此の意義に於て individuelle Kausalität は Rickert に對しては因果律の凡ての場合に於て成立し得べきものなりと解釋して誤まりなしと思ふ。

Windelband は此の說に對して Willensfreiheit の問題に結び付けて頗る犀利なる解剖を試みて居り而して Rickert の說に反對して居る。(2) 即ち問ふて曰はく、一

定の結果が一定の原因に一義的に(eindeutig) zuordnen せられざるべからずとするは何によるか。若し因果律の範疇に何等かの gegenständlich の意義を與ふべしとするならば因果の間には此の兩者を必然的に結び付くべき ~~das sachliche Verhältnis~~ が存在しなければならない。然るに此の事實上の關係に對しては原因及び結果の事實が時間的經過の中に果して幾度起るべきやと云ふことは其の意味を尋ぬるものとしては全然無關係である。或は人が意欲し或は人が一の行爲をなすと云ふことは凡て其の人の本質又は性格より起り來ると見るに於ては、假令其の個々の形ちに於ては明に其の通りには繰返すことを得ず從つて此の意義に於ては如何なる法則にも zurückführen することを得ないと云ふものでも、其の本質より見て常に必然的なりと云はざるを得ない。であるから、もし其の人が同じ狀態に置かるゝと云ふことが假に繰返して實現せられ得るとするならば、必ず前と同じ樣に意欲し同じ樣に行爲をなすと見なければならない。然らずんば如何なる一回的に起つた結果も其の本質には偶然的であると云はなければならないし、其の人と必然的に結び付いて居るものとは云へない。即ち Wirken の必然性と云ふことは論理的に凡ての繰返しの場合に同樣なりと云ふことを其の意味の內に包含して居るものである。此の如き繰返しが事實上生ずるか又は經驗的現實體の狀態として不可能なりや否やと云ふことは概念的、論理的關係を考ふる場合に於ては全く無關係である。人の性質又は人の性格は其の意欲する所又は其の行爲に働くものであつて普遍的法則性を表示するものである。もし或特定の個々の結果に對して必要條件が唯一回的のみであつて繰返すことが出來ない樣な工合に完全に充されたりとするも、之によりて其の結果は普遍的即ち法則的に定められたりと結論するに寸毫の影響をも及ぼすことを得ぬものである。經驗的なる繰返すことを得ざる Kausaleinmaligkeit も亦概念的、潛在的には其の要素の一般的、法則的、能動生成的 (wirksam) の本質を含有するものである。故に假令事實上繰返されざること又は繰返さるべからざることが方法論上に於て他の現象と比較し得べからざることとして論じ得